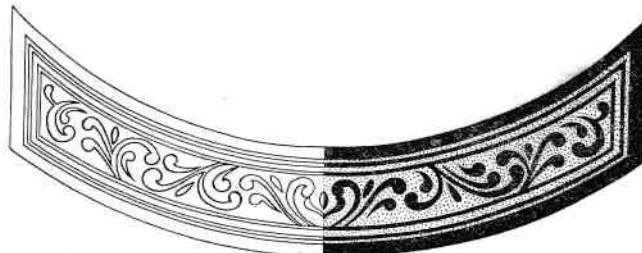


信濃國分寺跡

第3次発掘調査概報

(付 第2次発掘調査概報)



上田市教育委員会

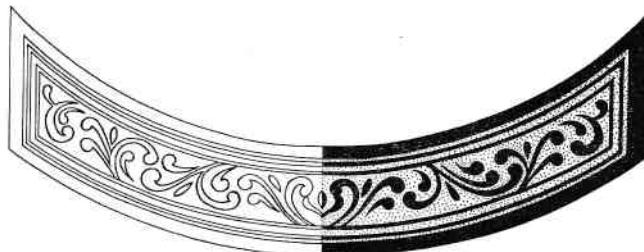
上田市教育委員会

1967

信濃國分寺跡

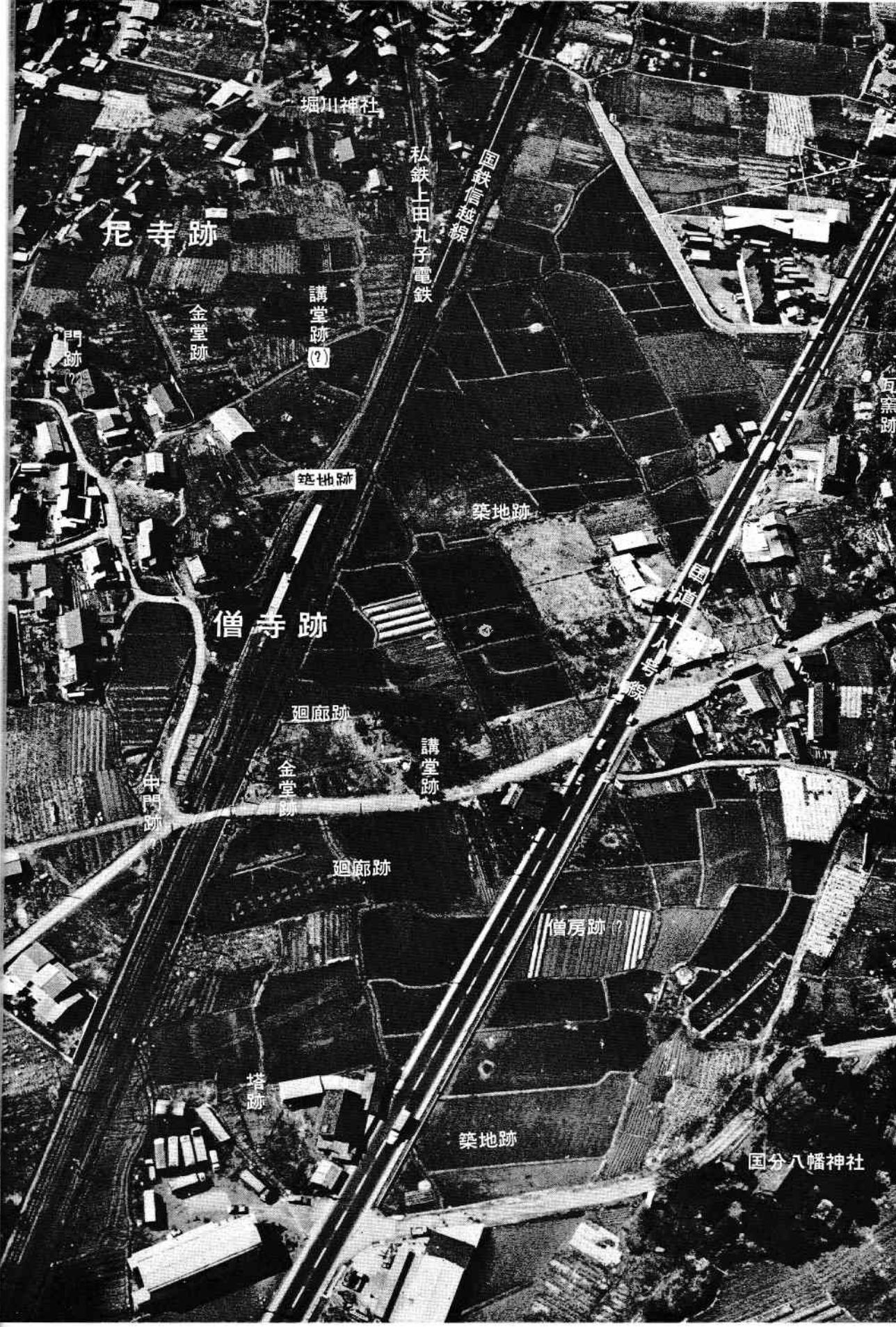
第3次発掘調査概報

(付 第2次発掘調査概報)



上田市教育委員会

1967



信濃国分寺跡発堀調査担当者

顧問	宝月圭吾	(東京大学文学部教授)
"	一志茂樹	(長野県文化財専門委員)
調査団長	斎藤忠	(東京大学文学部教授)
副団長	内藤政恒	(東京薬科大学教授)
調査員	大川清	(東邦音楽大学助教授)
"	坂詰秀一	(立正大学文学部講師)
"	倉田芳郎	(駒沢大学文学部講師)
"	宮下真澄	(上田小県誌編集歴史部主任)
"	五十嵐幹雄	(上田市立神川小学校教頭)
"	原嘉藤	(松本市立今井小学校長)
"	米山一政	(長野県文化財専門委員)
"	桐原健	(長野県立諏訪二葉高校教諭)
"	樋口昇一	(長野県立松本県ヶ丘高校教諭)
調査員助手	川上元	(上田市立博物館学芸員)
調査補助員	阿部黎子	(東京大学大学院学生)
"	大金宣亮	(早稲田大学学生)
"	石山勲	(")
"	安藤鴻基	(")
"	阿阪潔	(")
"	渡辺竜史	(立正大学学生)
"	金井正彦	(")
"	戸根与八郎	(")
"	飯島武次	(駒沢大学学生)
"	戸田有二	(国士館大学学生)

(昭和42年3月31日現在)

まえがき

国土を愛し、文化を尊び郷土にはこりをと願う声は今やうるおいのある生活を求める日本人本来の心情であります。

奈良時代の重要な文化遺跡としての信濃国分寺跡は、最近の建築ブームの中にあって、工場、住宅等が盛んに建てられており、さらに国鉄の複線化問題等も関係し放置しておくと、遺跡の調査が永久に不可能になるので、過去2回の調査に引き続き第3次の緊急発掘調査を昭和42年3月6日から25日まで20日間にわたっておこないました。

本書はこの信濃国分寺跡第3次緊急発掘調査と運輸会社の整地作業でブルトーザーのひと掘りにより発見された瓦窯跡の調査の記録であります。

発掘調査は、国、県の補助を含め百万円で上田市が実施しましたが、寒空の下かじかんだ手での発掘作業は非常に地味なものでした。従来まったく予想もつかなかつた貴重な遺跡や遺物がつぎつぎに検出され、学術的な発掘調査は合理的にすすめられました。

ここに斎藤忠調査団長を中心とする諸調査担当の先生方のご苦労はもとよりのこと、考古学関係者、学生、生徒をはじめ地元住民、一般市民からも多くの協力があり、深く感謝しております。

市では、この遺跡が学問上重要であるばかりでなく、郷土愛の育成、市民文化向上につながるものとして、史跡公園化の計画を進めて、その保護と活用を考えております。

この概報を刊行するに当って東京大学教授斎藤忠氏、東京薬科大学教授内藤政恒氏、東邦音楽大学助教授大川清氏、立正大学講師坂詰秀一氏、駒沢大学講師倉田芳郎氏等の諸先生に絶大なるご助力を賜わったことを、衷心から厚く御礼申し上げます。

昭和42年9月10日

上田市長 小山一平

例　　言

- 本書は、昭和42年3月、約20日間にわたり実施された長野県上田市大字国分字仁王堂・明神前および道場の信濃国分尼寺跡の第3次緊急調査に関する報告概要である。
- 緊急調査にあたっては、国費ならびに県費の補助の交付を受け上田市が実施した。
なお、この調査は緊急の目的で行なわれたため、堂宇の所在、規模などに主眼を置き、堂宇の内部的な検討はこれを避けた。
- 本書はあくまで中間的な報告で概要であるから、結論的な記述はつとめて避けた。また、内容も種々不備な点のあることを了承されたい。これらは、後日第4次以降の調査が実施されたときに、訂正補充する所存である。
- 執筆は各調査員が各自執筆した原稿をもとにして、斎藤がまとめたものである。
- 写真撮影は主として大川氏が、一部は内藤氏が行なった。拓本は大川氏の調製によるものである。遺跡の実測は、各担当者の指導により、各大学の学生の手をわざらわした。
- 今回の調査には、上田市長を中心とする調査協力会各位の積極的な御協力、国分寺住職塙入舜道、良道両師、現地の有志の諸氏特に金井正一・石橋鉄藏・山辺裕夫・山越修藏・山越茂・山崎正夫諸氏の力強い御支援を頂いた。特に上田市教育委員会社会教育主事原昌孝氏の献身的な努力に対しては感謝を表するものである。また印刷にあたっては、矢野印刷KKの編集部の各位に種々お世話になった。茲に衷心より厚く御礼を申し述べる。
- なお付録として昭和41年に行なわれた第2次調査の概要を掲載した。これは昨年上田市教育委員会においても刊行し、また雑誌「信濃」にも掲載されたものであるが、新たに国分尼寺跡も確認し、僧寺跡の寺域もほぼ想察され、塔の存在も考えられるなど重要な成果があり、第3次調査とも関連するところが大きいので、若干修訂を加えた上、読者の便をはかって再録したものである。

△なお第1次調査の成果は、『信濃国分寺跡』として既に公刊されている。

—斎藤記—

目 次

まえがき

例 言

I	調査のねらい	1
II	調査の概要	1
1	僧寺の調査	1
①	僧寺金堂跡・講堂跡東側地区の調査	1
②	僧寺金堂跡・講堂跡西側地区の調査	2
2	尼寺の調査	2
①	金 堂 跡	2
②	講 堂 跡	4
3	尼寺寺域の東限・北限の調査	5
①	東門 地区	5
②	北限 地区	6
4	古 瓦	7
5	瓦 窯 跡	10
III	むすび	12

あとがき

図版目次

- 卷頭 信濃国分寺跡全景（朝日新聞社提供）
- 第一 僧寺東側廻廊遺構・同一部栗石群 (1)北から (2)北から
- 第二 僧寺東側廻廊一部・同残存の礎石 (1)西から (2)西から
- 第三 僧寺東側廻廊の栗石群 (1)南から (2)西北から (3)東から
- 第四 僧寺西側廻廊地区土器出土状態・僧寺東側廻廊地区土器出土状態 (1)南から
(2)西南から
- 第五 僧寺西側廻廊地区円面硯出土状態・円面硯 (1)東北から
- 第六 尼寺金堂跡東南隅を望む (1)・(2)東南から
- 第七 尼寺金堂東側の石組と雨落溝 (1)東から (2)東南から
- 第八 尼寺東門地区・尼寺東門地区東限瓦出土状態 (1)北から (2)西から
- 第九 尼寺東北地区石敷遺構・尼寺北限地区石敷遺構 (1)南から (2)東から
- 第十 尼寺出土瓦 (1)・(2)東門地区 (3)～(6)金堂南側 (7)金堂西方表面採集
- 第十一 国分寺跡北方一号瓦窯跡・国分寺跡北方二号瓦窯跡群 (1)南から (2)東北から
- 第十二 国分寺跡北方一号瓦窯跡・国分寺跡北方瓦窯跡群 (1)北上から (2)南上から
- 第十三 国分寺跡北方一号瓦窯跡・国分寺跡北方二号瓦窯跡 (1)西から (2)西北から
- 第十四 国分寺瓦窯跡出土土瓦
- 第十五 国分寺瓦窯跡出土瓦
- 第十六 文字瓦及び堤瓦拓本 (1)・(2)・(3)文字瓦
(1)は「更」第一号瓦窯跡・(2)・(3)は「伊」尼寺金堂跡
(4)・(5)堤瓦（熨斗瓦）第一号瓦窯跡構造材

挿 図 目 次

第一 僧寺跡及び尼寺跡復原図	折込2~3
第二 僧寺金堂跡・講堂跡・廻廊跡配置図	折込2~3
第三 尼寺金堂跡・講堂跡実測図	2~3
第四 尼寺講堂跡南側石積状態写真	4
第五 尼寺金堂跡雨落溝実測図	折込6~7
第六 出土古瓦(Ⅰ)(燈瓦・字瓦)拓本	8
第七 同 (Ⅱ)(字瓦)写真	9
第八 同 (Ⅲ)(鬼瓦)拓本	9
第九 瓦窯跡一号(東)実測図	折込10~11
第十 同 二号(西)実測図	折込10~11

I. 調査のねらい

第3次調査は、昭和42年3月6日から3月26日まで行なわれた。

今回の調査の目標は、昨年第2次調査によって明らかになった尼寺跡の寺域を確認し、同じく尼寺金堂跡の規模を明らかにし講堂の所在をたしかめること、及び僧寺跡の鐘楼跡、經蔵跡の所在を明らかにして、あわせて昨年確認することのできなかつた廻廊跡を追究すること、また今年の2月に偶然発見された国道北沿い瓦窯跡を調査することなどの諸点におかれた。そしてこれらの諸地区の調査によって、将来の史跡公園の計画に対して確実な資料を提供することを考慮した。

II. 調査の概要

1. 僧寺の調査

① 僧寺金堂跡、講堂跡東側地区の調査

金堂、講堂の東側に鐘楼跡を検出すべく、その中軸線を基準として東に35メートル、巾各2メートルのトレンチを十文字に入れた結果、礎石1と根石群が発見された。その礎石及び根石の間隔は、南北約3メートル(10尺)東西約2.4メートル(8尺)を有するものであり、東西の間は2間であることが確認されたが、南北は約3メートル(10尺)の間隔をもって根石が連らなっていることが判明し、ここにおいて鐘楼跡ではなく、廻廊としての規模を有する建物跡の存在が想定されるに至った。

日時の関係により全掘することができなかつたが、ほぼ6割を調査し、その規模を把握することができた。

建物は、南北24間約76メートル(236尺)(8尺+10+8)、東西2間約4.9メートル(16尺)(8尺+8)を有し、基壇は、南北は分明でないが、東西約8.5メートル(28尺)を有するものである。

礎石の原位置が移動せぬもの僅かに4個のみであったが、根固めの栗石は、ほとん

ど残存していた。基壇は、河原石と瓦片をもって構築されているものであった。

この建物は、明らかに廻廊としての規模を有するものであり、第2次調査の段階まで金堂の東辺を探索したが、遂に検出を果せなかつたことが理解された。すなわち、廻廊は、金堂と中門を結ぶものではなく、講堂と中門とを結ぶことが明らかになったのである。中門との接続状態は線路内にかかるため発掘不可能であるが、講堂との関係はかなり明瞭に知ることが出来た。講堂東辺の南寄りに接続する接点の部分は道路敷のため未発掘であるが、約5メートル東に離れた部分の基壇の南及び北側に鎧瓦(創建時のもの主体)を比較的多く含む瓦の包含層が存在しており、建物の内外を識別することが出来たのである。

② 僧寺金堂跡・講堂跡西側地区の調査

東側において廻廊跡の検出が果たされたので、西側廻廊の検出を意図して、東側と同一地点に発掘区を選定して実施した。

しかし、東側と異なり、西側は、かなり後世における攪乱がはげしく、明確にすることが不可能であったが、河原石の集積が部分的に認められた。

この地域の調査は、次回調査の折の精査を待つこととなった。

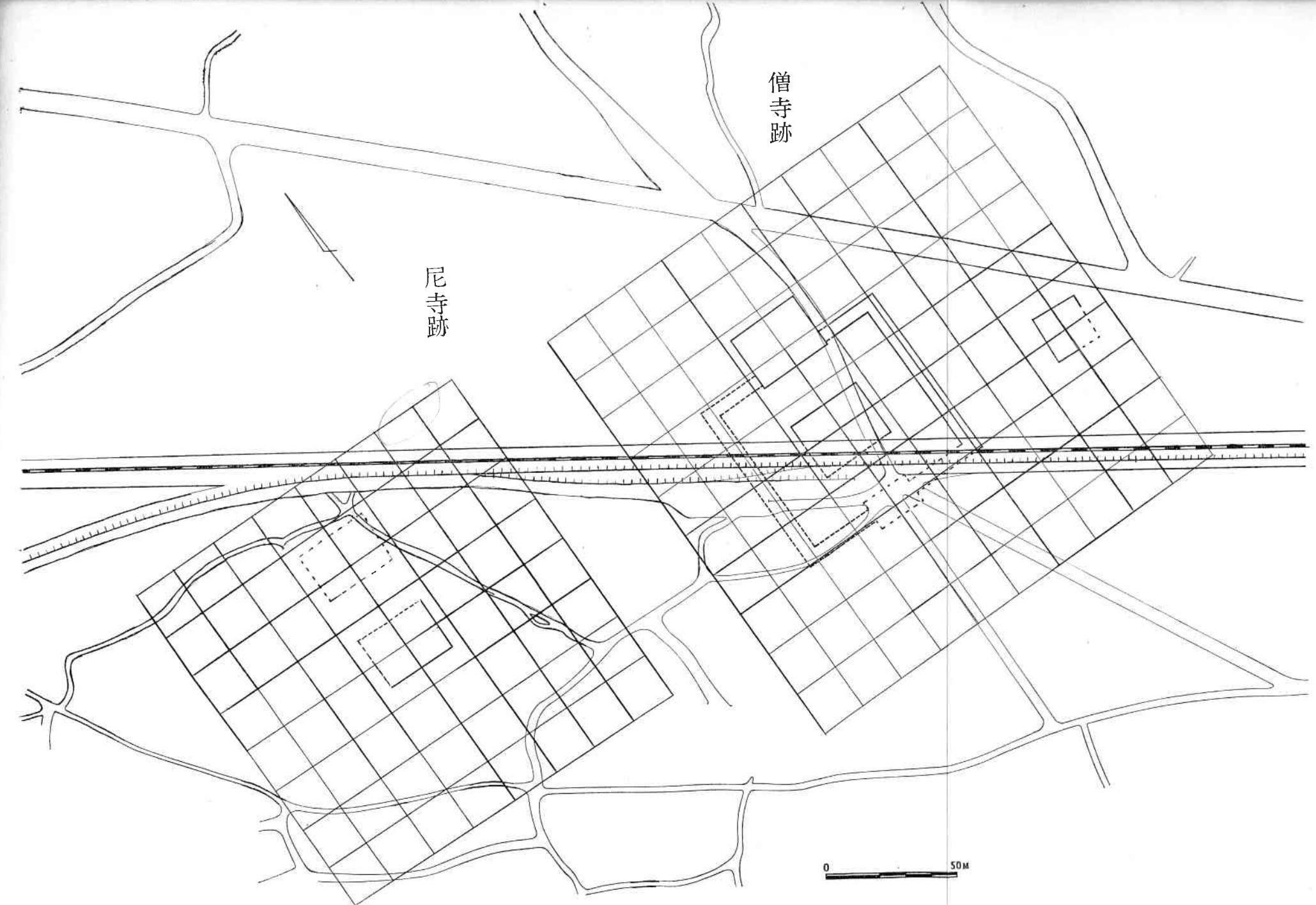
ただ、この部分から平安時代末に比定しうる住居跡及び土師器が発見され、僧寺廃絶時期をめぐる問題に対して一つの基準が認められるところとなった(坂詰秀一)。

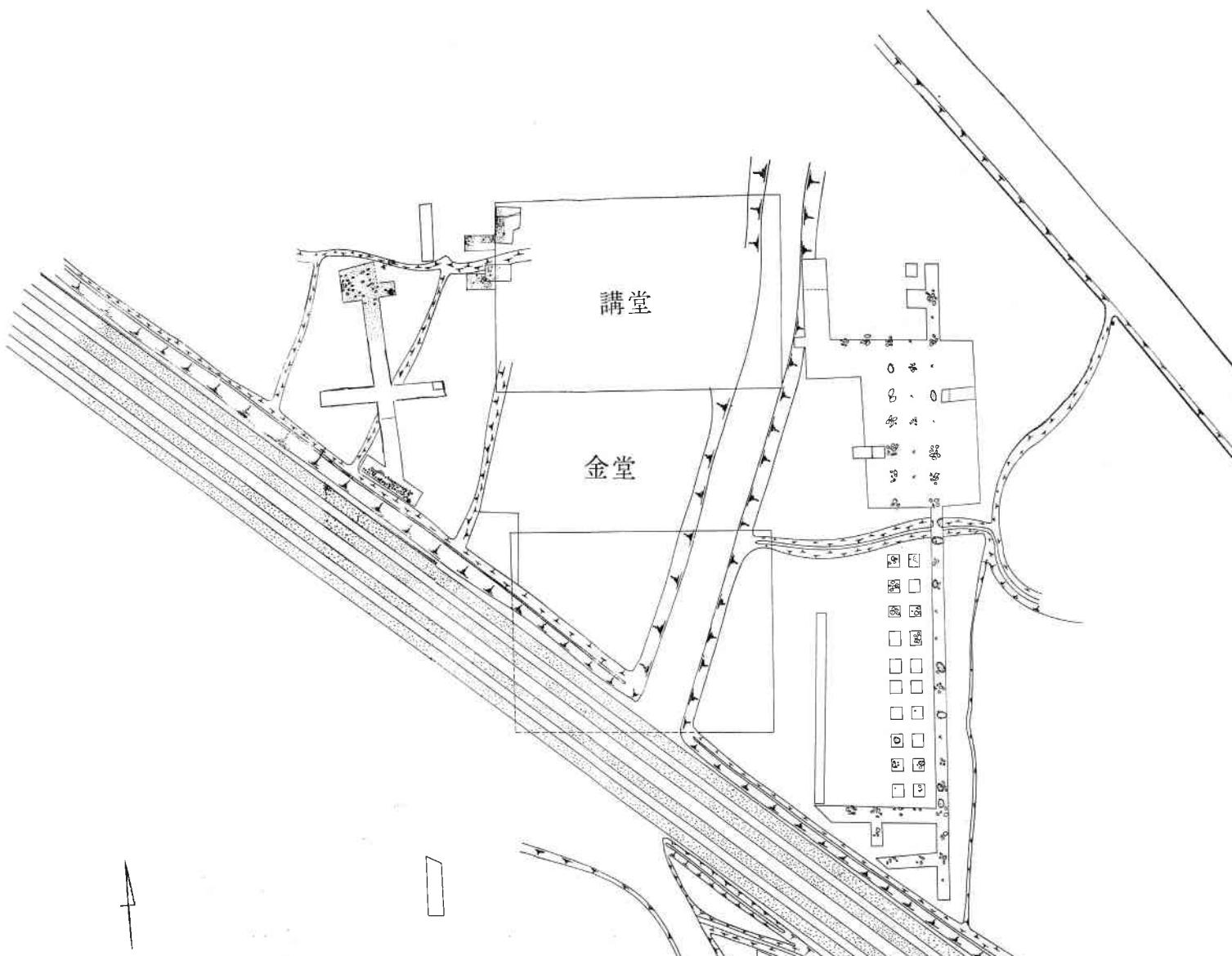
2. 尼寺の調査

① 金堂跡

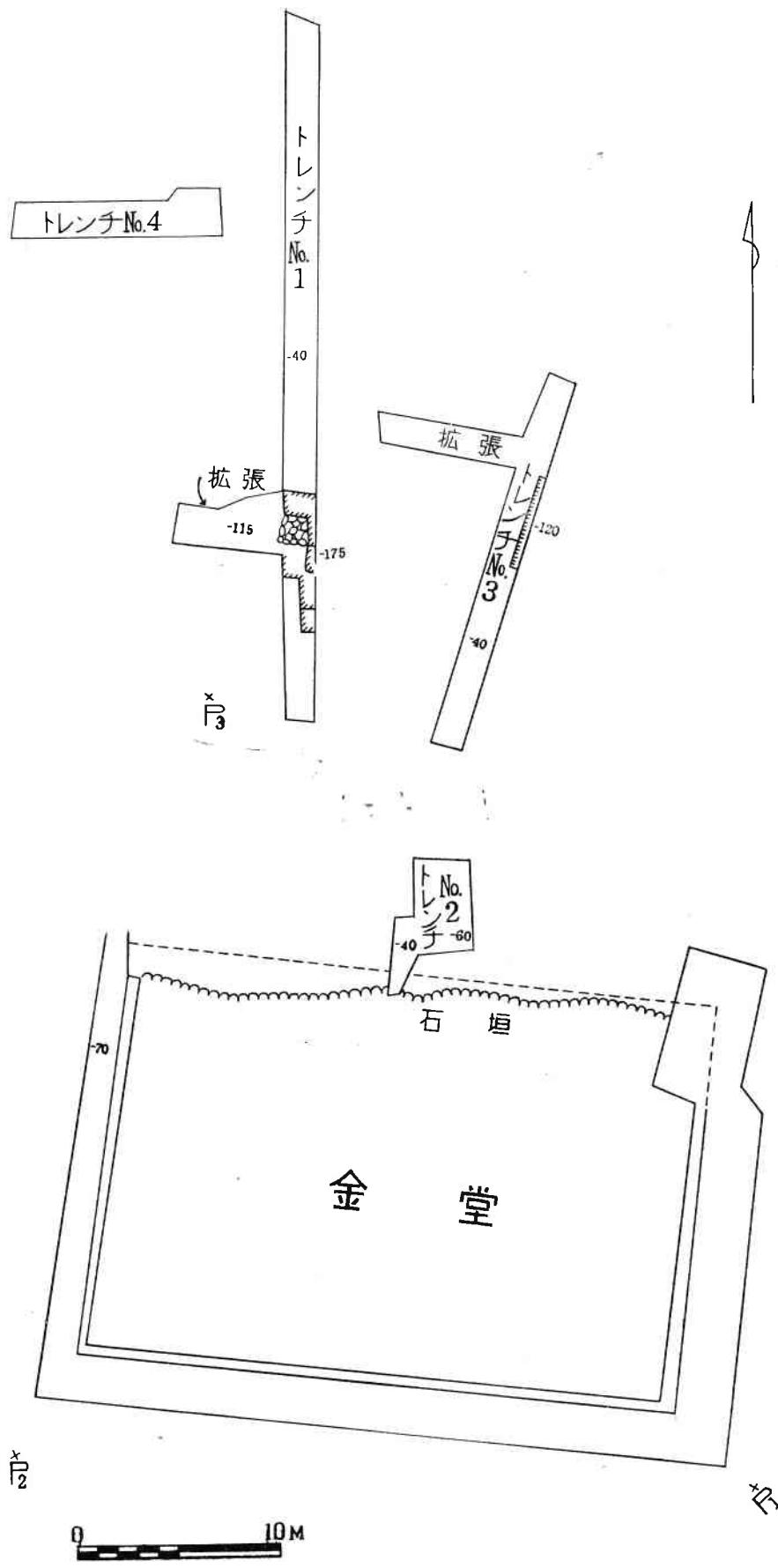
尼寺金堂跡 昨年の試掘で確かめられた金堂基壇の全貌を明らかにすることを目的とした。

(ア) 金堂東側を3.5メートル幅に発掘した。その結果、桑畠地表下約80センチの雨落石組溝は東南隅より北方15メートルまでほぼ完全に残り、それ以北は後世の攪乱のため、その北限は不明であった。なお、基壇側面は地覆石(安山岩の河原石)の上に40～55センチ高の羽目石(安山岩河原石)を立てた遺構が2ヶ所発見された。羽目石の





插図第三 尼寺金堂跡・講堂跡実測図



内側には20～30センチ幅の石を控え積とし、羽目石を支えると共に、基壇周辺を固めていることがわかった。羽目石の上部構造はどのようにあったか、葛石も原状を示すものは残存せず、ただ凝灰岩角材の短かいものが数個存在したが、この程度では葛石と確認するわけにはいかなかった。

(イ) 金堂南側(正面) 3メートル幅に発掘した。雨落石組溝はほぼ全面遺存し、地覆石列東西幅は29.9メートル(98.4尺)で天平尺100尺を思わせた。なお中央雨落石組溝の外側には長さ2.9メートル(9.8尺)、奥行0.92メートル(3.2尺)の自然石石組が残存し正面階段の下部と推定された。正面には東側に残存した羽目石の原位置にあるものは見当たらなかった。

(ウ) 金堂西側 桑園の内部と石垣にわたって幅1メートルを発掘した。雨落石組溝と地覆石は断続的に残存していたが、西南隅より125メートル以北は石垣を造るために全部破壊されて、北西隅は不明であった。この方面にも基壇羽目石は原状では保存されていなかった。なお西南隅より11.2メートル(36.5尺)を中心として、2.42メートル(8尺)幅20センチほどの石敷が見出された。

これを西側階段跡と考えれば、基壇南北長は22.2メートル(73尺)となるわけであるが、この石敷の西部は石垣築造時に破壊されているので階段跡と確定するまでにはいかなかった。

(エ) 金堂北側 昨年試掘の際も地下が桑園造成の際の深掘りで攪乱されて、基壇側面を見出しえなかつたが、今回は中央や、東寄りの畠地の境界線にトレンチを入れた。幸にこの境界下は幅約25センチほどが鍬を入れたあとがなく、堅い土層が残り、この土層の地表下35センチに古瓦層の堆積を見出し、古瓦層の尽きた南辺を基壇北側と認めることができた。

(オ) 尼寺金堂基壇の規模 以上から金堂の規模は地覆石を基準として東西(正面)29.9メートル(98.4尺)南北19.09メートル(63尺)と考えられる。

② 講 堂 跡

金堂の北側中央西寄りの講堂推定地に幅2メートル、長さ31メートルのトレンチを

いれた。桑園があるので表土は深耕され40センチ～60センチは後世の掘り返しにあつていた。その下部を調査したところ、金堂南辺より約41メートルを中心として、その北部は河原石と砂礫の堆積があり、その南部は黒土層の深い堆積があつて南北に断層のあることがわかつた。試みに黒土層の下を検すると黄色のローム層があつた。耕土層60センチ、黒土層60センチである。その41メートルの断層を西に掘り調べたところ、表土下40センチの下には厚さ22センチの古瓦含有層が見られ、その下には厚さ35センチの土器（須恵器、土師器）含有層が見られた。そして地表下95センチで一辺1.2メートルにわたる平石敷の遺構があり、焼土、灰、木炭と共に須恵器破片が散乱し平瓶が発見された。この平石敷の北側には東西に不規則に並ぶ石列があつた。



挿図第四 尼寺講堂跡南側石積状態写真

次に第一トレンチの東方11メートルの畑の境界線に沿つて試掘し、第一トレンチの落込みがどのように続いているかを見た。約41メートルの線で同様の落ち込みを発見

した。

以上両トレンチに見出された落込みと石列により、講堂基壇南縁かと想像された。

西縁 講堂推定地の西側に入れたトレンチでは地表下40センチで河原石層に達したが、金堂西縁の真北の線で地盤に多少の落ちこみが見られた。

北縁 金堂南縁から60メートルの地点で地表下60センチで河原石の堆積に多少の変化がみられ同様の落ち込みが見られた。講堂内部と推定される地域からは瓦片の混入はごく少なく、須恵器片が相当多量に発見された。

以上のように、桑園によって深耕され、遺跡が破壊されているので、確実な遺構の把握はできなかつたが、地層の変化、瓦片の散在、須恵器、土師器の出土等によって、講堂跡と推定出来ないことはない。その場合、基壇の規模は、東西約30メートル(99尺)南北19メートル(63尺)で、金堂とほぼ同じ値で、金堂北縁と講堂南縁間は21.91メートル(72.3尺)となる。

しかし、以上のような次第で決定的な結論づけは今後の精査に待たねばならないであろう(大川清・宮下真澄)。

3. 尼寺寺域の東限・北限の調査

① 東門地区

金堂推定中心点から東へ74メートル(約244尺)の地点に南北9メートル×東西8メートルの石敷面があらわれた。これを当初の東門土壇の根固めと考えることができる。

この石敷面の東縁に沿って、60センチ幅の礫列が南北に18メートルにわたり延びている。土層からみて、石敷面が古く、礫列が新しい。礫列は、厳密には北5度40分東の方向を示し、金堂の方向、北5度東とは、やや異なるが、ほぼ並行しており、尼寺と直接の関係があると考えられる。

したがって、さきの石敷面と礫列の両方とも、尼寺の構築に關係ありとすれば、新旧2時期を推定することができる。いっぽう複合していないとすれば、石敷面を無関係とし得ても、礫列は尼寺に属するものと判断できる。

礫列北は信越本線の鉄道の下に入りこんでいる。南は金堂南縁の東への延長線上で断たれている。この部分は瓦片が散在し、一か所では径約60センチの掘りかた状の穴に大量の瓦が投げこまれた状態であらわれた。これはこの部位になんらかの構築物があったことが明らかで、門跡と推定できる。

② 北限地区

東限線の最北部では、推定金堂心から東へ74.5メートル(約246尺)の部分で、土層が著しく異なっている様子がみられた。西側は径40センチもある大礫が氾濫状を呈しており、東側は、約30センチ高い面で平坦にならされているようである。この平坦面と礫面の境界の線は、南北方向に一線をなしており、寺域の限界が土塁によっていたか築地によっていたかは不明であるが、地点から考えても、この線を尼寺東限の限界線と考えてよいであろう。

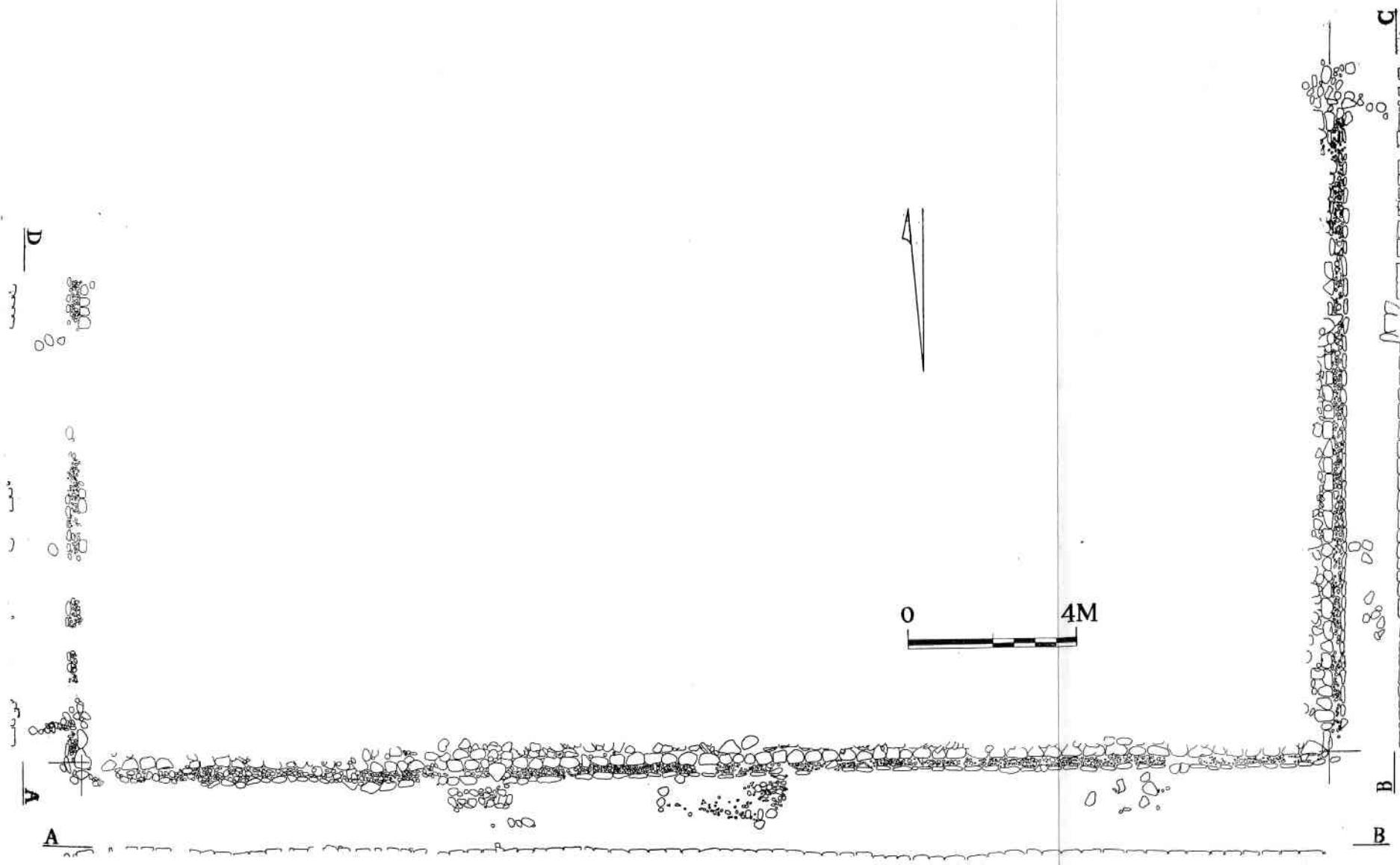
金堂の中心点とほぼ考えられる地点から北へ約74メートル(約244尺)の地点で、1.5メートル幅の根固め石状の、東西方向の石列と、その真上を通る40センチ幅の、やはり東西方向の礫列が8メートルにわたり認められた。

構築の複合を考えるならば、石列を当初の土塁の根固め、礫列を2次的な構築と考えることもできる。すると、東門地区でも、大石敷面を当初の東門跡、礫列と瓦散布面とを2次的構築に考えてもよいであろう。

以上によって、尼寺の寺域は現在のところ金堂の推定中心点から東へは74メートル(244尺)、北へは74メートル(244尺)とみとめられ、もし方形のプランを考えれば、148メートル(488尺)四方、すなわちほぼ80間四方ということも推察されるのである。しかし、次回には西の限界を調査して結論をみちびきたいと思う(倉田芳郎)。

4. 古瓦

今回の発掘調査による古瓦の出土量は、そう多いものではないが、平安期の文様瓦が3点あり、また従来のものとは異なる別種な鬼瓦、鎧瓦2点、および籠書き文字瓦が発見されるなど意義ある発見が少なくなかった。



(ア) 僧寺東側廻廊跡より平安初期の鎧瓦 (蕨手文あるいは飛雲文) 一点が発見された。

これは、昨年西側築地跡より発見の同期の宇瓦と一組をなすもので、廻廊の年代を示す資料ともなり、貴重な発見であった。

(イ) 尼寺東門跡と推定される部分の東端より(ア)と同一の一組瓦が接近して同時に発見された。造立時期を暗示するものであろう。 (挿図第六の1・図版第十の1)

(ウ) 尼寺金堂跡より平安期の鎧瓦 3種が発見された。

いずれも破片であるが、2点は蓮花文、他の1点は重闊文である。昨年発見の同期鎧瓦と共に、これによって尼寺の存続時期がかなり降るものと見られる。

(エ) 尼寺金堂跡より鬼瓦の眼の部分と鬼板と思われる小片が発見された。しかし遺憾ながら2点とも明瞭度を欠いている。

(オ) 尼寺金堂より、かなり時代の降る(平安末期) 篦書き平瓦が出土した。この下面是条痕たたき文を有し、上面(布目面)は布目が小口にまで印付されていることが特に目をひく。しかしてこの下面に「伊」の篦書きが施されている。恐らく伊那郡の略であろう。 (図版第十六の2・3) (同十の3)

このほか創建時の瓦が各所から出土しているが、とくに問題となるような新発見もないで省略する。

陶硯 僧寺金堂跡西方の廻廊地区に当る付近から、平安時代の土師器、須恵器と混つて発見された。良質の鼠色に堅く焼きしまった須恵質の円面硯で、惜しいことには約3分の2に失われ、また台脚部が欠失している。径16センチの円形の陸は中凹みで上面が著しく磨滑されて、かなり長期にわたり使用されたことを物語っている。陸の周囲を深い海(幅2.0センチ、深さ0.85センチ)がめぐり、0.8センチの幅をもつた外縁がこれを囲む。側面には突帯が施されていて、その直下の台脚部に接しているが、台脚部には長方形の透し窓が32個穿たれていたことが痕跡により知られる。極めて優秀な陶硯で奈良盛時の製作と思われ、長野県における最優秀品と見て誤りない(内藤政恒)。

挿図第六 出土古瓦 (I) 拓本



(1) 鐮瓦 (飛雲文) 尼寺東門付近 (約 $\frac{1}{3}$ 大)



(2) 宇瓦 (蓮花文) 第一号瓦窯跡構造材 (約 $\frac{1}{3}$ 大)

挿図第七 出土古瓦（Ⅱ）（字瓦）写真



僧寺講堂跡西側南北トレンチ（約 $\frac{3}{4}$ 大）

挿図第八 出土古瓦（Ⅲ）（鬼瓦）拓本



尼寺金堂跡（約 $\frac{1}{2}$ 大）

5. 瓦 窯 跡

今年の2月工事の際に偶然発見されたもので、尼寺の金堂跡の北東約200メートル、国道の北沿いの地にあたる。

2基東西にわたって並んでいる。東(向って右)を一号、西(向って左)を二号と仮称した。窯の中心線は、一、二号ともに同方向(東偏24度30分)である。またそれぞれの中心線の間隔は4.3メートルである。

窯構造は2基とも平窯で、瓦をつかって構築している。焚口はかなり大きい河原石を左右に立て、その上に大石をのせている。あたかも古墳の横穴式石室の羨門を思われる。燃焼室はラッパ状に焼成室にむかって広がり、焼成室との境は障壁によって分けられ、下部に3個の通焰孔を設けてある。

焼成室は、二号跡で7本、一号跡で6本のロストルを設け、奥壁内に3本の煙道をつくってある。煙道は二号跡で明瞭にであったが、1号跡ではこの部分が石垣の下にあるため発掘し得なかった。二号跡とほぼ同一構造の煙道がつくられていたと考えられる。窯は燃焼室において現存状態がほぼ当初の高さと考えられるが、焼成室は四隅の壁が破壊されているので明確でない。しかし高さは1.3メートル程度であったと考えられる。

各窯跡の計測値は下記の通りである。

一号跡 現在長 約4.6メートル

燃焼室 奥行 2.4メートル

障壁部幅 1.8メートル

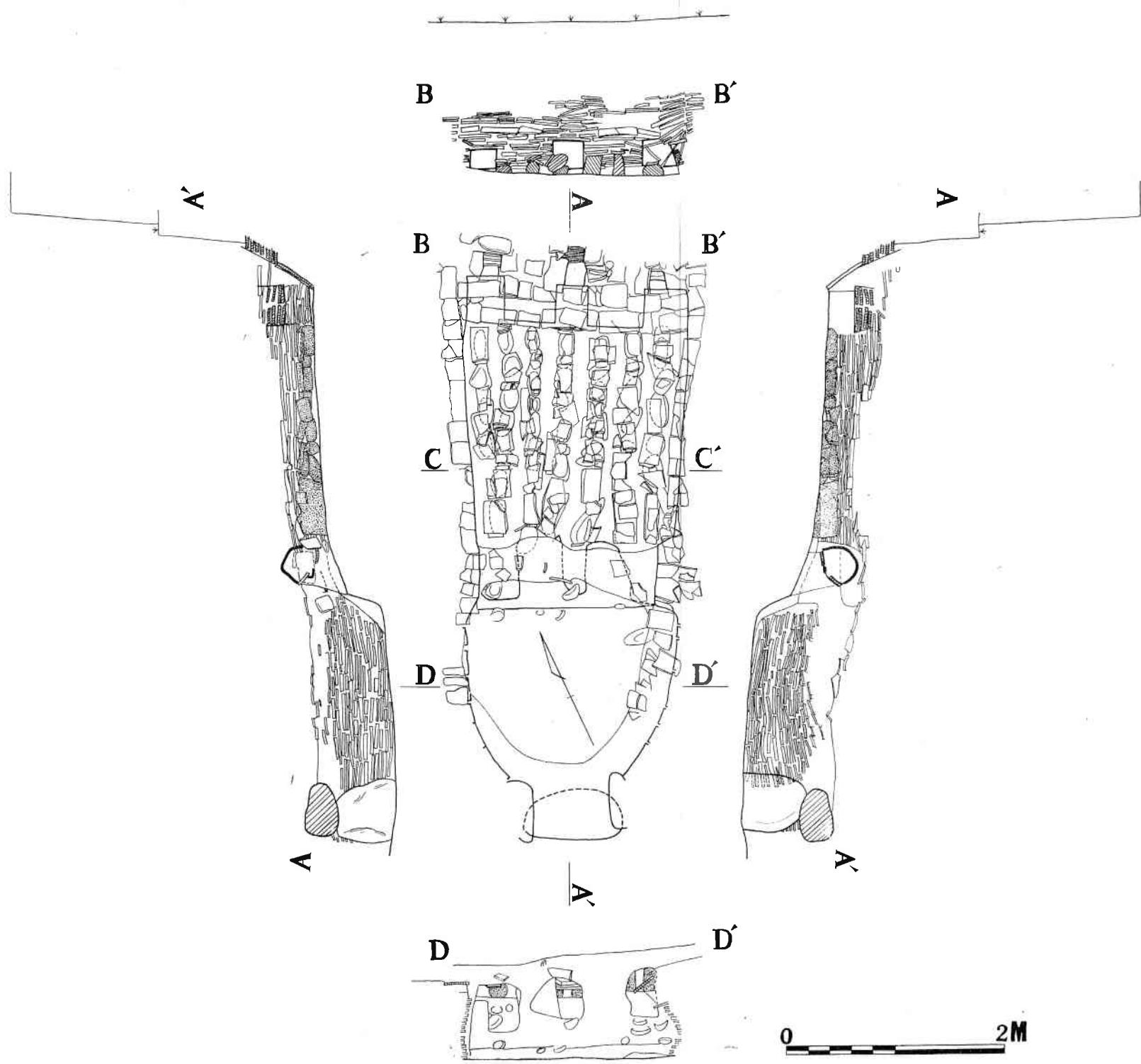
焚口 幅 0.9メートル

高さ 0.5メートル

室の高さ 0.65メートル(底より天井まで)

障壁厚さ 0.3メートル

通焰孔 3個



焼成室	現存奥行	1.9メートル
	幅	1.9メートル
ロストル 6本 (高さ平均20センチ) 構築材は切石、河原石、男瓦、女瓦		
二号跡	全長	5.4メートル
燃焼室	奥行	2.4メートル
	障壁部幅	1.9メートル
	焚口 幅	0.7メートル
	" 高さ	0.54メートル
	室の高さ	0.65メートル
	障壁厚さ	0.3メートル
	通焰孔	3個
焼成室	奥行	2.0メートル
	障壁部幅	1.8メートル
	奥壁部幅	2.0メートル
	奥壁厚さ	0.7メートル
	煙道	20センチ×20センチ

ロストル 7本 (高さ平均20センチ) 構築材は切石、河原石、男瓦、女瓦

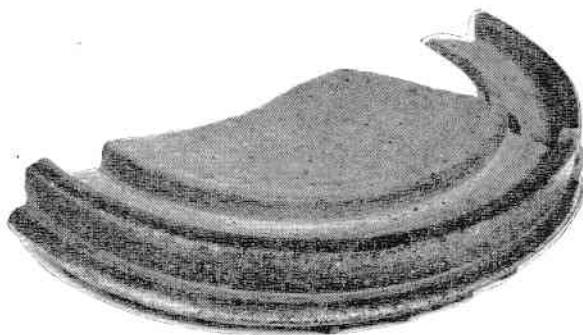
なおこれらの窯の構築材は、国分寺創建時の瓦と本窯の工人の作製した瓦である。この窯の操業は、平安時代初期における国分寺（僧寺、尼寺）の大修理に際してのものと考えられる。本県坂城町南日名瓦窯の瓦と関係が深く、同一工人による造瓦とみなされる。また補修瓦（宇瓦）に「更」の籠書き文字の記されていることは（恐らく更級郡の略か）、尼寺金堂跡から発見された平瓦に「伊」の籠書き文字が記されていることとともに、重要な資料となるものであろう。ちなみに本窯跡での瓦燃成数は瓦を3段詰にした場合 約500枚と考えられる（大川清）。

信濃国分寺跡発掘調査協力会役職員

会長	小山	一平	(上田市長)
副会長	下宮	喜市	(上田市議長)
"	高楓	勇道	(上田市助役)
"	高橋	良吉	(上田市教育委員会委員長)
顧問	村上	富道	(長野県社会教育課長)
"	徳永	正人	(県社会教育課文化財係長)
"	林茂	樹正	(" 指導主事)
協力員	八田	たつよ	(上田市教育委員)
"	山浦	厚	(")
"	柄沢	袈裟	(")
"	宮下	春哲	(上田小県誌刊行会長)
"	滝沢	二三	(" 編集主任)
"	遠滝	萬憲	(" 刊行委員)
"	滝沢	泰三	(" ")
"	清水	利雄	(" 歴史部委員)
"	矢島	謹一	(地元市会議員)
"	山辺	登雄	(")
"	堀込	義久	(八日堂復興会代表)
"	山浦	蔵修	(")
"	山越	聖道	(")
"	山辺	道夫	(")
"	塩入	良信	(八日堂国分寺住職)
"	樋口	順恒	(上田市国分自治会長)
"	下村	一太	(上田市上沢自治会長)
"	山辺	夫	(上田市上堀自治会長)
"	山崎	正芳	(上田市下堀自治会長)
"	山内	芳鉄	(上田市黒坪自治会長)
"	竹橋	茂	(関係土地所有者代表)
"	石越	夫	(")
"	山辺	裕正	(")
"	金山	義	(")
事務局長	平深	一雄	(上田市教育長)
事務局次長	鈴木	守人	(上田市社会教育課長)
事務局員	正昌	孝子	(上田市社会教育係長)
"	原井		(上田市社会教育主事)
"			(事務局書記)

(順序不同)

図 版



(出 土 研)

図版第一 僧寺東側廻廊遺構・同一部栗石群



(1) 僧寺東側廻廊遺構
北から



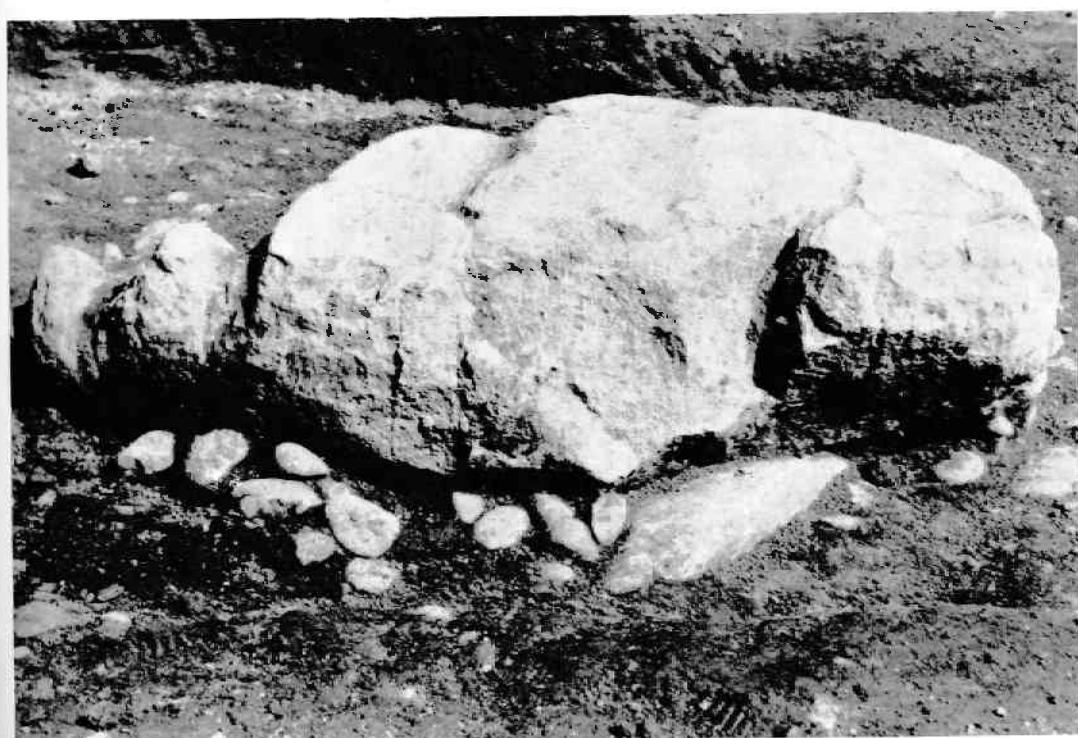
(2) 同一部栗石群
北から

図版第二 僧寺東側廻廊一部・同残存の礎石



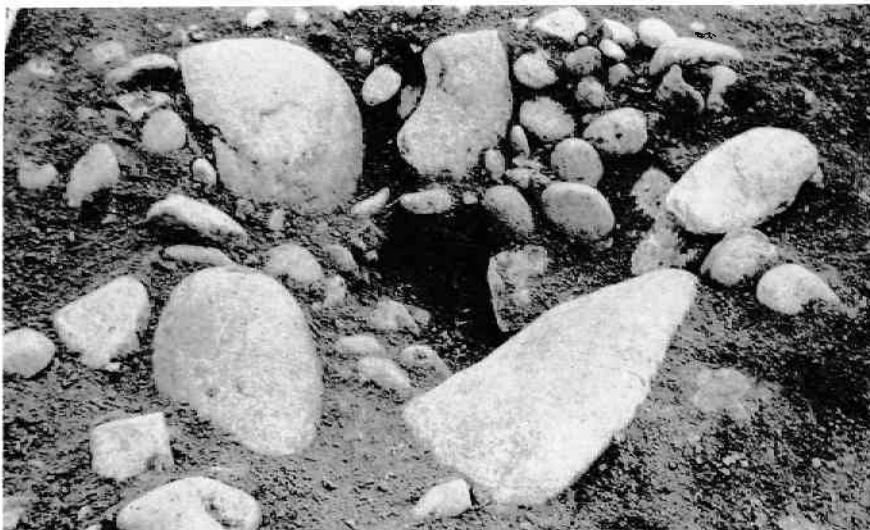
(1) 僧寺東側廻廊一部

西から



(2) 同残存の礎石

西から



僧寺東側廻廊の栗石群

僧寺西側廻廊地区土器出土状態・僧寺東側廻廊地区土器出土状態



(1) 僧寺西側廻廊地区土器出土状態

南から



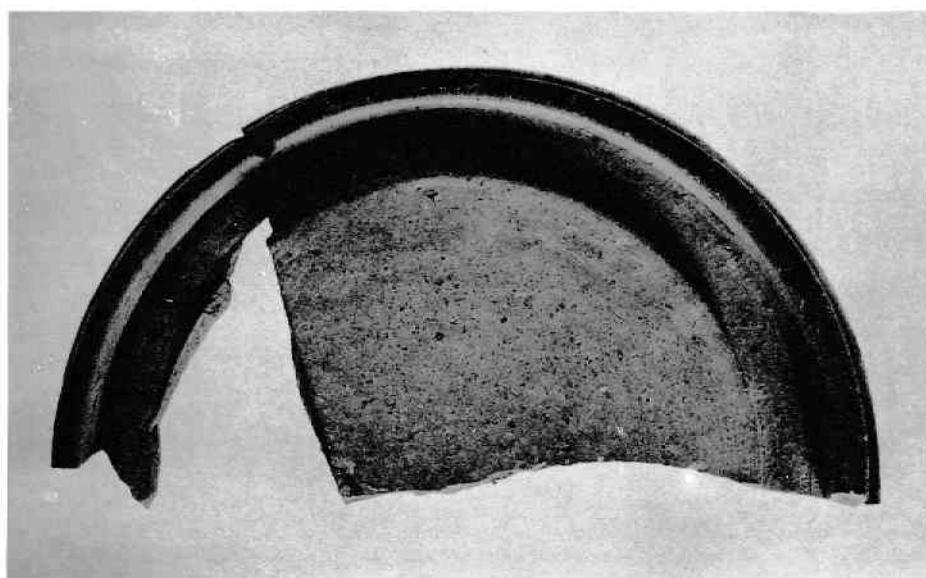
(2) 僧寺東側廻廊地区(南側)土器出土状態

西南から



(1) 僧寺西側廻廊地区円面硯出土状態

東北から



(2) 円面硯



(1) 尼寺金堂跡東南隅を望む

東南から



(2) 尼寺金堂跡東南隅を望む

東南から

図版第七 尼寺金堂東側の石組と雨落溝



(1) 尼寺金堂東側の石組と雨落溝

東から



(2) 尼寺金堂東側の石組と雨落溝

東南から

図版第八 尼寺東門地区・尼寺東門地区東限瓦出土状態



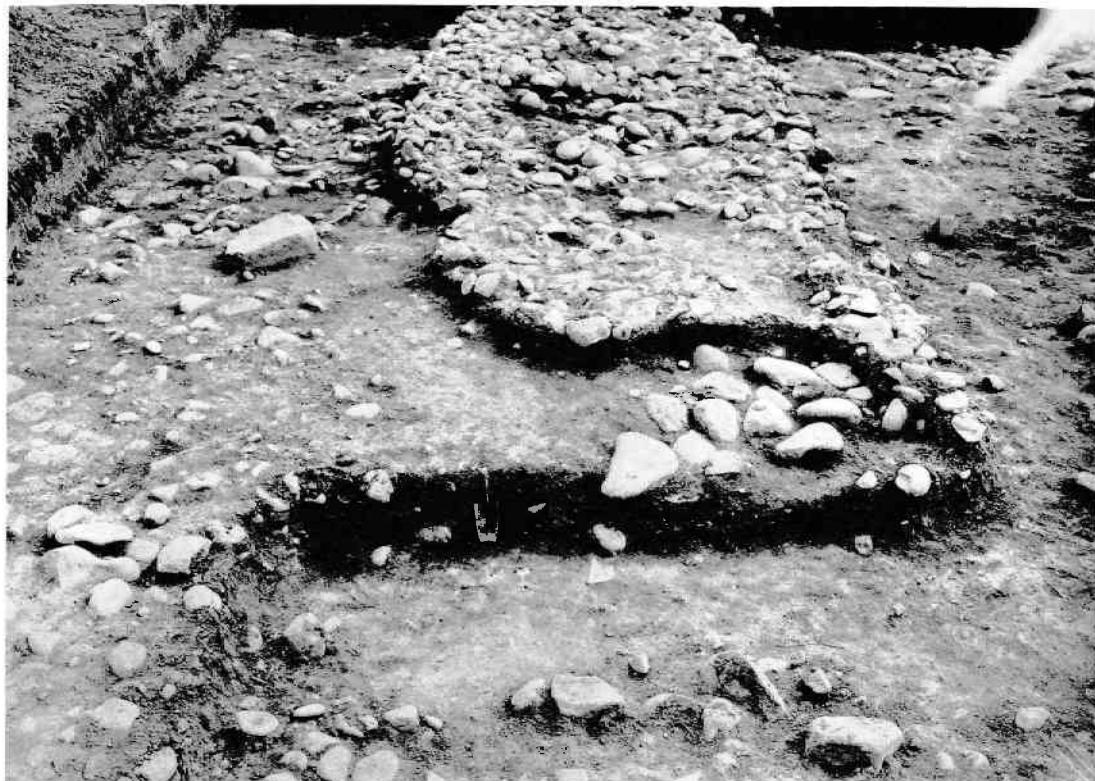
(1) 尼寺東門地区

北から



(2) 尼寺東門地区東限瓦出土状態

西から



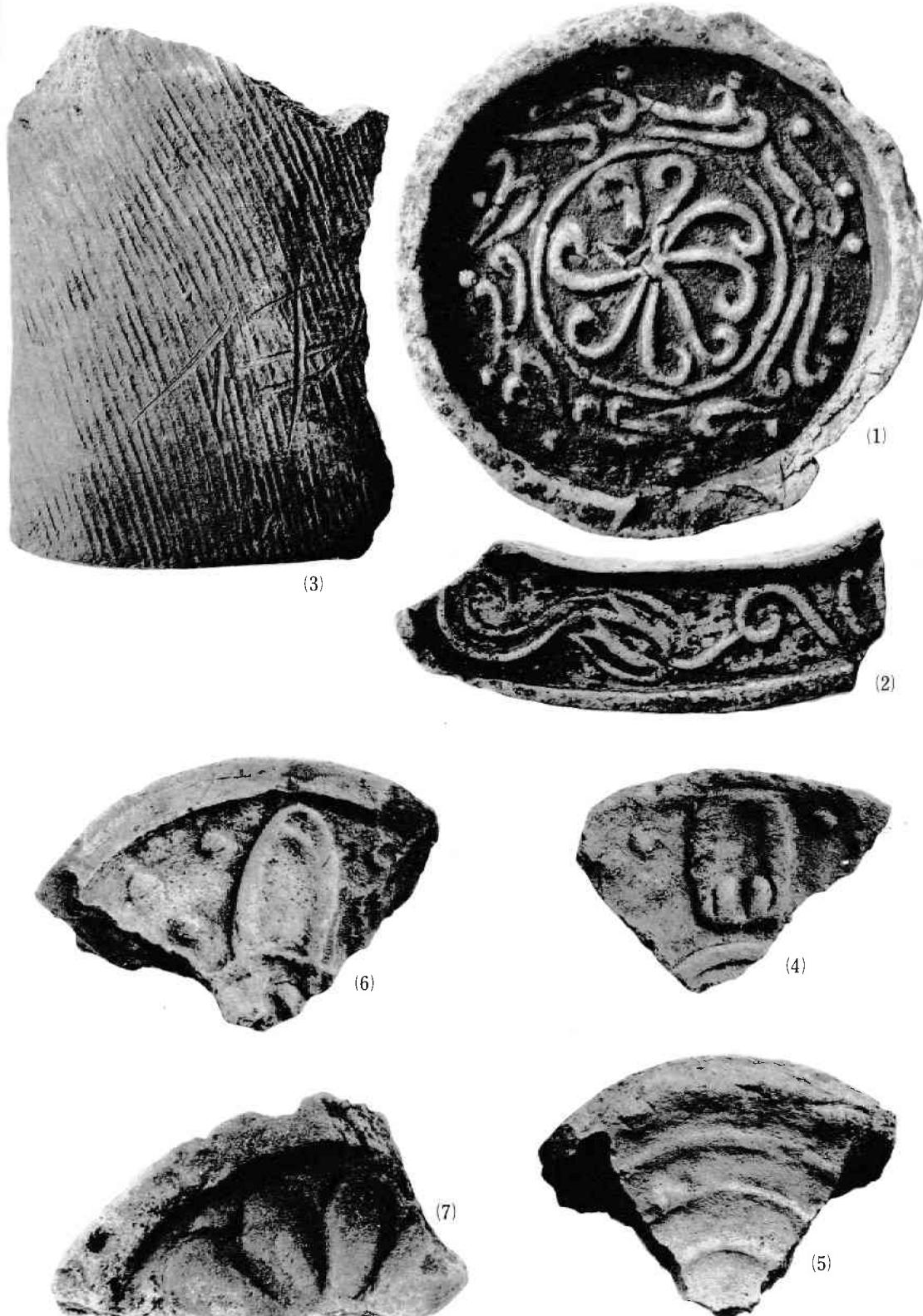
(1) 尼寺東北地区石敷遺構

南から



(2) 尼寺北限地区石敷遺構

東から



尼寺出土瓦 (1)・(2) 東門地区 (3)～(6) 金堂南側 (7) 金堂西方表面採集

(縮尺 $\frac{1}{2}$)

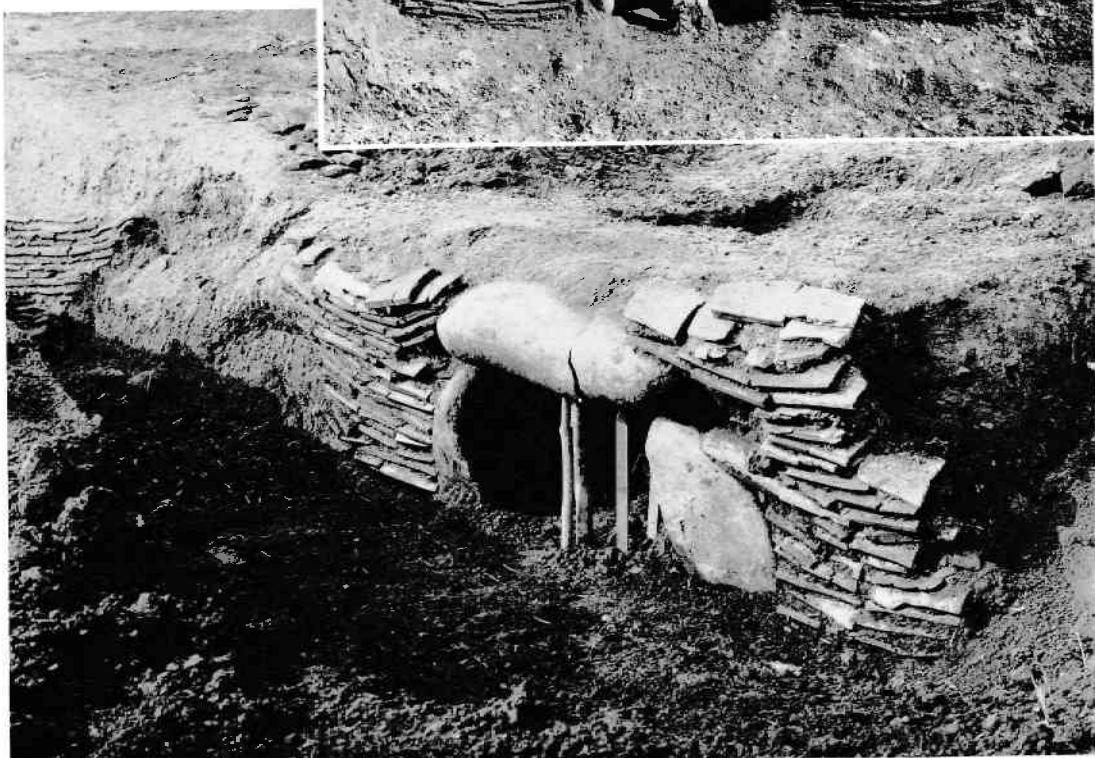
(1) 国分寺跡北方二号瓦窯跡

南から



(2) 一号瓦窯跡

東北から





(1)
二号瓦窯跡

北上から



(2) 瓦窯跡群 右一号 左二号

南上から



(1) 二号瓦窯跡

西から



(2) 一号瓦窯跡

西北から



(文字は実大)

国分寺瓦窯跡出土字瓦



一字瓦一



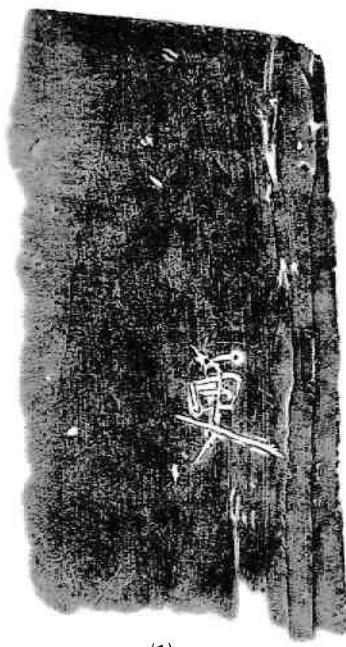
一字瓦一



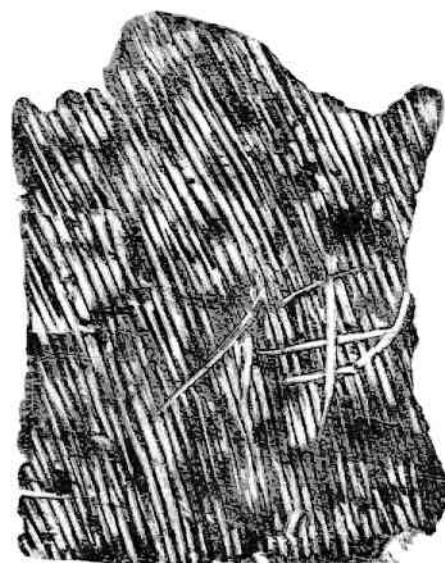
一鬼瓦脚部一

(縮尺 $\frac{1}{2}$)

図版第十六 文字瓦及び堤瓦拓本



(1)



(2)

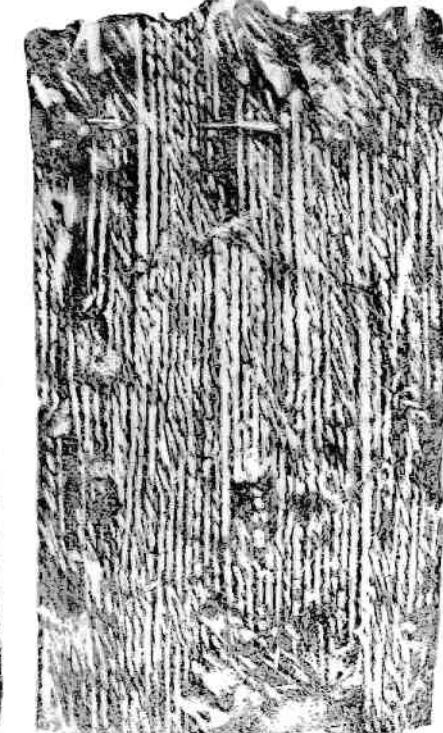


(3)



(4)

文字瓦



(5)

(1)は「更」一号瓦窯跡

(2)・(3)は「伊」尼寺金堂跡

(4)・(5) 堤瓦(熨斗瓦)第一号瓦窯跡構造材

—付 錄—

第2次発掘調査概報

目 次

I	緊急発掘調査の目的および調査団の構成	1
II	調査の地域と経過	3
1	A 地区 (推定南大門西地区)	3
2	A' 地区 (推定南大門東地区)	4
3	B 地区 (講堂跡西地区)	4
4	B' 地区 (八日堂駅舎南地区)	5
5	C 地区 (講堂跡北東地区)	6
6	D 地区 (国鉄線北地区)	7
7	E 地区 (金堂跡東方建築遺構)	7
8	F 地区 (金堂東南地区)	8
9	金堂東側の推定廻廊遺構の検討	10
10	G 地区 (下堀地区)	10
III	遺構と遺物の考察	12
1	遺構の考察	12
2	遺物の考察	15
IV	む す び	18
1	寺域の四至と伽藍配置の問題	18
2	僧寺跡と尼寺跡との関係の問題	19

図版ならびに挿図目次

図版 第一	金堂東南隅雨落石組溝	(1)東より	(2)西より
" 第二	金堂跡東方建築遺構	(1)北より	(2)北西より
挿図 第一	尼寺跡を旧東山道より望む写真	2
" 第二	発掘の位置を示す図	5
" 第三	C地区の玉石群写真	6
" 第四	僧寺金堂跡東南隅実側図	9
" 第五	出土古瓦拓本	16
" 第六	出土の硯写真	16
" 第七	現国分寺の景観写真	22

I 緊急発掘調査の目的及び調査団の構成

長野県上田市所在の信濃国分寺跡の緊急発掘調査は、去る昭和38年3月に第1次を実施した。これについては昭和40年発行の『信濃国分寺跡』に詳述されている。

今回は、これに引き続いての第2次の調査である。前回においては、従来、金堂跡と思われていた基壇が実は講堂跡であることが確認され、金堂跡は、その南に、一部国鉄線下に食い込んだ状態で発見されるなど、いくつかの成果を得た。ところが、最近に至って、国分寺跡周辺の地域は、市街地に近接しているために、急激な変貌を見せてきた。すなわち、家屋建設がことに目立ち、中でも国鉄線南半地帯には人家が激増し、遺跡の北西地区は、一部が工場の建設予定地となるなど、旧観が著しく損われる状態に立ち至った。それに加えて、国鉄の複線工事計画も具体化しつつあるなど、きわめて優慮すべき事態に直面したといつても過言ではない。

今回の調査は、一日も早くこれらの最悪の状態を軽減せしめることを目的としたものである。したがって、主力を寺域の四至などの究明におくことにした。なお、この調査は、上田市教育委員会が主体となったものであり、国ならびに県からの補助金の交付があった。昭和41年3月18日着手し、同月31日に終了した。

調査団は下の人員によって構成された。

調査団長 斎藤 忠（東京大学教授）

同副団長 内藤 政恒（東京薬科大学教授）

調査員 大川 清（東邦音楽大学助教授）

坂詰 秀一（立正大学文学部講師）

宮下 真澄（上田小県誌刊行会歴史部編集主任）

米山 一政（長野県文化財専門委員）

原 嘉藤（松本市今井小学校長）

五十嵐幹雄（上田市立神川小学校教頭）

樋口 昇一（松本県ヶ丘高等学校教諭）

桐原 健 (諏訪二葉高等学校教諭)

調査補助員 大金宣亮・安藤鴻基 (早稲田大学学生)

遮那藤麻呂・渡辺竜史 (立正大学学生)

以上の14名に加えて、顧問として、一志茂樹 (長野県文化財専門委員長)・宝月圭吾 (東京大学教授) 両氏が委嘱され、また、長野県教育委員会社会教育課指導主事林茂樹氏 (埋蔵文化財担当) は度々現地にきて、諸般の労をとられた。一方、事務的な面では、上田市教育委員会社会教育主事原昌孝氏は連日現地に来て、地元の石橋鉄蔵氏と共に発掘すべき土地の交渉、その他の雑務に終始努力せられた。また、国分寺をはじめ地元の各位も終始絶大な好意と協力を寄せられた。ここに深く感謝の意を捧げたい。なお、上田高等学校郷土班の生徒諸君も時折参加し、発掘に協力されたことを一言し謝意を表する。(斎藤 忠)。



挿図第一 尼寺跡を旧東山道より望む

II 調査の地域と経過

今回の調査は、前述したように、寺域の四至の究明ということが主なるねらいであったが、更に第1次の際、究められなかつた金堂基壇南東隅の遺構の確認と、寺跡西方の古瓦片・土器片を出す下堀地区の遺跡の調査という3点に主眼を置くことにした。そこで、発掘を始めるに当たり、発掘地点と各地区での担当調査員の検討を行なつたが、その後、発掘の進行に伴なつて種々改変があり、結局、つぎのようくに決定した。

- A地区 推定南大門西地区（寺域の南縁西地区） 坂詰担当
- A'地区 推定南大門東地区（寺域の南縁東地区） 桐原担当
- B地区 講堂跡西地区（寺域の西縁北地区） 坂詰・五十嵐担当
- B'地区 八日堂駅舎南地区（寺域の西縁南地区） 内藤担当
- C地区 講堂跡北東地区（寺域の北縁地区） 米山担当
- D地区 国鉄線北地区（寺域の東縁地区） 桐原・樋口担当
- E地区 金堂跡東方地区 坂詰および立正大班担当
- F地区 金堂基壇南東地区および推定廻廊地区 大川および早大班担当
- G地区 下堀地区 宮下担当

以下、各地区を中心にそれぞれの担当者の記述をもとにして調査の経過ならびに成果を略述することとする。（挿図第2参照）

1. A 地 区

金堂と講堂との中心を結ぶ中軸線で、金堂の中心より南方約100メートル地点の西方約40メートル附近に2本のトレンチ（第1トレンチは14メートルに2メートル、第2トレンチは15メートルに2メートル）を設定して寺域南縁の遺構の認定を試みた。この付近は、第1次調査のときは桑畠であったが、今回来てみると、驚いたことには、ここを通る南北の道路の東側にはすでに長屋ふうの人家と独立家屋とが建ち、西側にも一軒の平屋が建築中であつて、まことに憂慮すべき状態となつてゐた。2本のトレンチはその

建築中の平屋南方の空地に設定したのであるが、その内部には、現地表下約30センチに人頭大、ないし拳大の礫が一面に散乱し、諸所に古瓦・土師器・須恵器の破片が認められたほか、天保通宝錢一枚が見出された。また、礫層の一部には暗渠構築の跡もあった、以上の点より、この付近の地下は近世末、ないしそれ以降にすでに根本的な破壊にあい、完全に攪乱されていることが判明した。したがって念のため前記平家建築の西側に南北に長いトレンチ一本を設定して、地下の遺構を求めたが、ここも何ら得るところがなかった（坂詰秀一）。

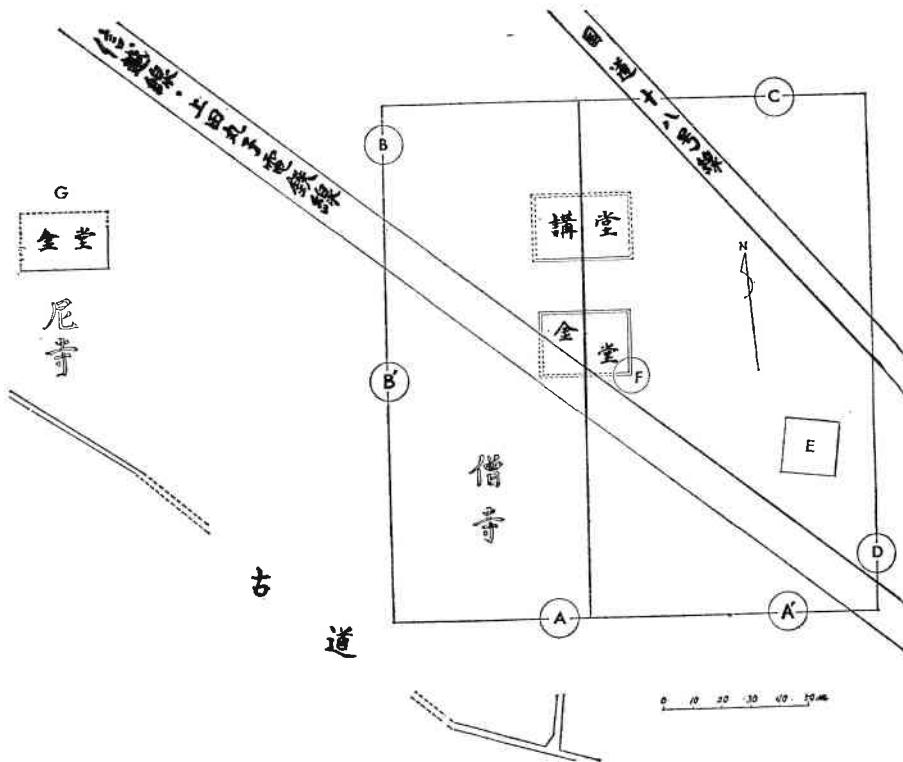
2. A' 地 区

この地区はややおくれて3月26日に発掘開始。位置は、前記中軸線の東方で、信越線南側の馬場氏宅と竹内氏宅との中間の桑畠中で、ここに南北方向に10メートルに1メートルのトレンチ1本を設定し、寺域南縁の東寄りの遺構の検出を行なった。

トレンチ全面にわたって、地表下45センチに礫の出土があり、更にその下には大礫の層が見られ、全体に堅く締まった層をなしていた。出土遺物は殆ど見られず、ただ南端より4メートル地点に丸瓦1個が南北方向の位置で発見されたに過ぎない。しかしこれより南にかけて礫の散布状態が密で堅いので、このあたりが遺構の中心部ではないかと見られる。因みに寺域を劃する構築物は、次ぎに述べるB地区内の相似た遺構と考え合わせて、南大門の両脇より派生した築地と考えられるので、右の礫の堅い部分こそ、築地の基礎遺構と思われる公算が大きい（相原健）。

3. B 地 区

講堂跡の西北方で、中軸線の西68.56メートルの水田中に、南北方面に40メートルに2メートルの長いトレンチを設定して、寺域西縁の遺構の有無を探究した。この地点の調査は、初め北寄りの部分を坂詰が、その後、南寄りの部分を五十嵐が担当したが、土層は上部より約21センチの表土（耕土）、次ぎに37センチ内外の黒土があり、その下に礫の散布された遺構が認められた。基盤には、大きさ15センチないし25センチくらいの礫が粘土で堅く固められて南北に連続して遺存していた。しかしてこの遺構



挿図第二 発掘の位置を示す図 (○印は今次発掘の場所)

の基盤は1.5メートル内外の幅をもち、径3センチから10センチくらいの礫を粘土で固めたもので、中央部がやや隆起し、東西の両端は心持ち低下している。基盤の遺存状態は北辺が最も良好で、北辺より南方13メートルくらいまでは礫の混入も多く、構築当時の様相が良く知られる。南へ行くに従って礫は乱れ、30メートル以南はそれが一層甚しく、遺存状態は目に見えて不明瞭さを増して行く。遺物については、北辺より18メートル付近から礫の間に瓦片の混入が目立ってくるが、その量はさほど多くはない。なお、15.7メートルの所より字瓦片が1個発見された（坂詰秀一・五十嵐幹雄）。

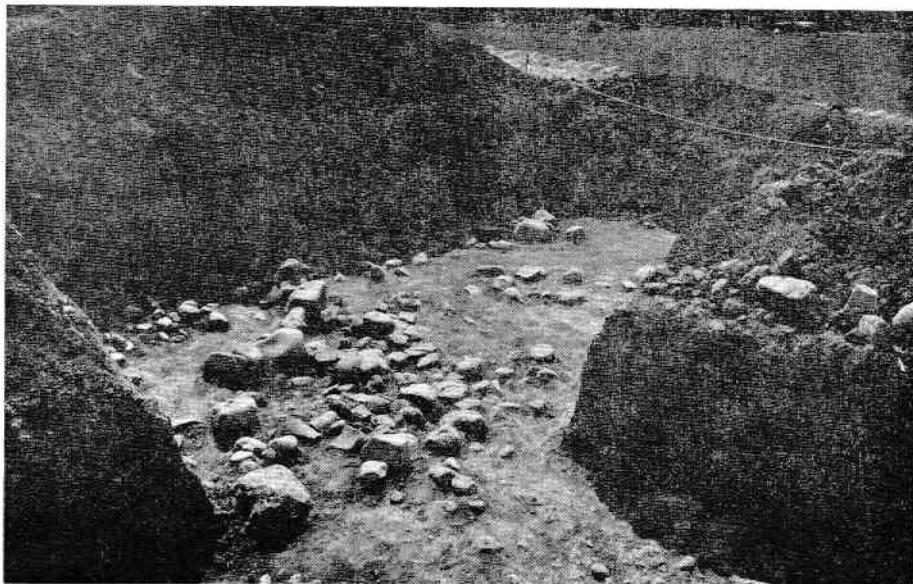
4. B' 地区

B地点に発見された南北に走る西側築地跡と推定される遺構をさらに南に追うべく、国鉄・丸子両路線を南へ越した八日堂駅舎の南を調査することにした。すなわち

駅舎前の彎曲した道路の東側に東西方向に5メートルに2メートルのトレンチを設定して、検討したが、道路に接した地表下35センチ内外のところより礫数個が乱れた状態で発見され、付近より瓦片数個が伴出したのみで、徒労に終わった（内藤政恒）。

5. C 地区

金堂・講堂中軸線の東方55メートル、ないし60メートル付近の水田に、北に第1、南に第2の2本のトレンチを設けて、寺域北縁の東西に走る築地遺構を探し求めた。第1トレンチは、金堂の中心より北方90メートル余の、中軸線より東方60メートル付近を北端とし、それより南へ長さ約10.2メートル幅1.3メートルの大きさをもつたものである。表土より90センチ下方に南北に径7～8センチの玉石が全面敷き並べられ、その長さは10メートル余であった。それらの底部は一様に固められているが、北端より2.8メートル南方付近より人頭大の礫が散在し、その下に砂土の薄い層があり、この付近を中心に幅1.3メートルほど3センチ前後高くなつて、東西に続いていた。しかしてこの部分より北は緩かに傾斜していた。第1トレンチからは遺物とし



挿図第三 C地区の玉石群

て見るべきものはなかった。以上の事実は、東西に続く1.3メートルの高い部分が、築地の基盤と見る公算が大きいが、その確認は今後の調査にまたねばならない。

第2トレンチ 第1トレンチの南に接して、長方形を2個つなぎ合わせたような形に東西に、長く掘った（東西9メートル南北7.4メートル）。表土下約80センチの面に玉石が並び、また、瓦片・土器片の混入も見られた。遺物は礫に混って丸瓦・平瓦の比較的大きな破片が出土し、また、土師器の高壙の高台、須恵器の蓋や水瓶の底部なども若干出土した。位置からして、僧坊か食堂のあった一角ではないかと思われるが、詳細は今後の調査にまちたい（米山一政）。（挿図第3参照）

6. D 地区

はじめに寺域東縁の南北築地遺構の推定位置として、中軸線の東方78メートルを設定したのであるが、この付近から意外にも後述するような正方形建物の遺構が現われた。そこで中軸線より東方1町—60間（実は54間で、108メートル）付近を仮りにあたってみることにした。この位置は松南トラック上田営業所の敷地と国鉄線とに挟まれた水田で、ここに8メートルに2メートルの東西トレンチを設定した。

表土（耕土）の厚さ17センチ、その下に33センチの茶褐色土があり、その下から小形の礫が現われた。この面は堅くしまり、約6メートルの幅をもって広がっていた。しかし東寄りは礫の散布が薄く、西端にやや大形の礫が南北に走っていた。この部分が築地の端と推定される。遺物は土師器の破片で1点出土したのみ（相原健・樋口昇一）

7. 金堂跡東方建築遺構（E地区）

この遺構は前述（D地区）したように、はじめ寺域東縁の南北築地遺構を求めるために発掘したのであるが、意外にもそこに正方形と推定される土質の変化、礫の散布が認められて、築地とは異なった遺構が発見されたのである。即ちその遺構は、金堂・講堂の中心を結ぶ南北中軸線より東方約65メートルの地点で、南北方向に粘土の存在を確認し、この粘土質の層はこの65メートルを西端として、南北19メートルの長さをもつて東方に広がっていることが確かめられた。

この遺構の南辺は15センチないし20センチの礫を東西に一直線に配し、北辺は若干

の粘土と礫とを敷きつめている。東辺は著しく、明瞭度を欠いているが、この部分は東西に掘られたトレンチ内において礫の散布が一応なくなる所をもって東辺と認めた。この礫の散布状態は北では拳大、南ではやや大形で、南に向かって僅かに層位が隆起していた。しかしてこの礫のなくなる位置は、西辺より測って19メートルあり、ここを遺構の東端と見なせば、一辺19メートルの建築遺構があったと考えられる公算が大きい。しかもこの19メートル内部の土層を詳細に検討すれば、それはバラス混在の茶褐色土層と黒色土層との互層より構築されていて、版築の状態を示し、基壇の痕跡と認められるものである。

尤も、この場所は直ぐ東隣に松南トラック上田営業所があり、この付近で地形が高くなっている関係上、発掘には最悪な環境である。従って東辺の限界も完全に決定し得られない嫌いはあるが、上記の一辺19メートルの遺構をいちおう認めるとすれば、このような正方形の建築遺構は、塔婆以外には考えられない。また、塔としても最適の位置にある。しかし、その建築遺構の規模については、後日の本格的な調査を待つて決定すべきであろう。(付録図版第二参照)

本遺構より出土遺物としては、表土層中より竜泉青磁片・至和元宝(北宋錢) 各1点、若干の古瓦片のほか須恵器・土師器の破片があり、また、遺構外の西寄りから円面鏡の破片が発見された。(挿図第6参照)

なお、この建物の方向は東偏10度内外で、伽藍全体の方向と著しく違っていることは、とくに注意を要することである(坂詰秀一)。

8. 金堂東南地区(F地区)

第1次発掘の際、日時の関係で末調査に終った金堂跡東南隅地区を調査することにした。即ち発掘位置を確認するために、第1次に調査済みの東北隅と、東側石組溝の北半部とを再度発掘した後、本格的に発掘を開始した。その結果は、比較的容易に東南隅付近の石組溝の一部を発見することができた。(付録図版第一及び挿図第4参照) 隅の部分は遺憾ながら破壊されて原形をとどめていなかったが、第1次のときに発見していた石組溝内の底石は、今回の発掘で隅の底石であることが確認された。この底石から西



插図第四 僧寺金堂跡東南隅（実測図）

方1.7メートルの間は、2個の底石を遺存するのみで側石はなく、それより以西1.7メートルにわたり完全に石組溝を残し、それより内側（北側）に敷かれた玉砂（幅約1メートルの）もほぼ完全な姿で遺存していた。残存石組溝の西方は完全に破壊され、その延長線上とその南寄りに大小の瓦片が小石に混って多数堆積されていた。現存の石組溝内には赤褐色の焼土が堆積し、さらにその両側石の上部は火熱を受けたと見え、剝離したり、焦げた痕跡が認められた。なお、この部分の焼土層内からは鉄釘四片が発見されている。

以上の発見によって、金堂の東南隅が明らかとなつたので、ここで金堂の正確な規模を知るために、西北隅をも再発掘し、これによつて38年の第1次調査において明瞭でなかつた金堂遺構の全貌を明らかにすることができた。すなわち、石組溝を除いた金堂の規模は東西31.4メートル、南北22.47メートルである(大川清)。

9. 金堂東側の推定廻廊遺構の検討

金堂と中門と連結をする廻廊跡は第1次に確認されなかつたので、今回の調査でも引き続きその探索を行なつた。即ち金堂東側の石組溝(南端に近い部分)より東5メートルのところに16メートルに2メートルのAトレンチと、更にその東に接して5メートルに2メートルのBトレンチを南北方向にそれぞれ設定した。その結果、深さ65センチほどで一面に礫の散在する面を発見した。この面はかなり固く、瓦片もかなり見られたが、Aトレンチ北端より南約5メートル付近に多数の礫が厚く詰まつていて、後世の暗渠とも見られる状態であった。また、Aトレンチの中央付近に30×40センチ大の自然石が2個約3メートル間隔で発見されたが、これが廻廊の礎石であるといった積極的な証明はでき難かつた。

以上の如く、この場所は後世の破壊もあるらしく、廻廊跡の確認はかなり困難と思われる所以、次期調査に際して改めて金堂東側全面を発掘して、徹底的な調査を行なう所存である(大川清)。

10. 下堀地区 (G地区)

この地区は上田市下堀字明神前で、大部分が桑畠である。以前よりこの付近一帯は古瓦や須恵器・土師器などが散布し、周囲より僅かに隆起していた。国分寺跡の西に接しているので、国分尼寺跡とも想定される地域である。そこで今回はこの地域の中でも特に遺物を多く出す1814~15番地の桑畠を中心に調査を実施することとし、先ずその北側に東西のトレンチを設定した。このトレンチは東西約17メートル、幅2メートル余で、地下50センチで古瓦層と東西に並ぶ列石四条を見出したが、これらの出土状態はいずれも乱れていて、当初のものとは認め難かつた。そこでこれと直角に北方に

7メートルに2メートルのトンレチを掘ったが、北へ行くに従って瓦片の散布が稀薄となり、遺構より遠のくことを示した。

つぎにこの桑畠の南側の小路上に9メートルに約1.5メートルの東西トレンチを設定して検討を加えたところ、地下70センチのところより東西に走る雨落石組溝を発見した。その構造は僧寺講堂のものに似ている。思いがけない成果に力を得て、トレンチを断続的に東西に拡張して、東南隅と西南隅の遺構をも発見、さらに東側の石組溝をも発見することができたが、東側遺構は東南隅より15.15メートル北へ進んだところから攪乱されており、それ以北は明瞭でなかった。北側遺構も同じく攪乱の度が甚だしく、所々に暗渠らしい部分もあって明瞭でなかった。西側の遺構は西南隅より北走する石組溝がやや乱れて明瞭度を欠く恐れもあり、また、これを調査する時間的な余裕もなかったので、次期の調査に譲ることにした。

以上の如く、見事に発見された本遺構は、不明瞭な東北隅・西北隅・北側の3か所を除いてはほぼ完全に発見された。ところで本遺構の規模について、南側石組溝内部の東西両隅石の相互の距離は29.94メートル(98.8尺)であり、南北のそれは、前述したように東側で15メートル余は明瞭であるが、それ以北は判明しない。しかし、以上の遺構よりして、周囲に雨落溝をめぐらした基壇であることに誤りなく、位置と溝の構造上からも、国分尼寺の金堂と考えてよいであろう。

金堂の確認に伴なって、南側雨落溝より南方12メートルの地点を北端として南へ22メートル前後の細長いトレンチを設定して、中門の遺構を探した。しかし、顯著な遺構の検出には至らず、ただトレンチ内の南寄りに礎石にふさわしい自然石(径75×60センチ大)1個が、比較的安定した状態で見出されたが、礎石としての確証は得られなかった。この地区での遺物は北方トレンチ及び石組溝付近の全域にわたり瓦片が若干発見され、とくに北方トレンチ付近より僧寺と同じ鎧瓦と宇瓦(挿図第5の3)を出し、また平安時代の鎧瓦片(新種)が1点出土した(挿図第5の4)。しかし、南方トレンチ内部からは瓦片の発見はなかった。この外、須恵器・土師器の破片も至る所から比較的多く出土した(大川清・宮下真澄)。

III 遺構と遺物の考察

1. 遺構の考察

今回の発掘では、以上に述べた箇所について遺構の調査を実施したが、次に、これらの遺構内容に基づいて可能な範囲で考察を試み、さらに種々な問題点を提起したいと思う。

(ア) 四至の考察

第1に寺域を劃する境界について考えてみると、四至いずれも一応の痕跡を認めることができたが、正直のところ、南・北・東の三方はその遺構もかなり稀薄で、次期調査において再度の精密な検討を加える必要を痛感している。ただ西側においてはその北寄りでの遺構は最も良好で、約1.5メートルの幅をもって礫を粘土で固めた痕跡が比較的よく認められた。恐らくこれを基盤として上部に築地が構築されたものと思われ、約1.5メートル幅はこの種のものとして適當であろうと考えられる。尤もこの遺構をもって直ちに築地と決めるのは早計で、或は土壘状のものかも知れない。

なお、この基盤と思われる遺構が北方と南方とで破壊され、ことに西北隅遺構の不明な点は、惜しみても余りある。

西側の北寄りを除いた他の三方の遺構は、前述したように基礎薄弱で再考を要するが、ともかく、今回得られた以上の遺構資料に基づいて四至の規模を測定すれば、次のようになる。即ち、金堂中心よりの距離は、

東 108メートル 南 94.25メートル

西 68.56メートル 北 83.80メートル

となり、寺域全体の広さは、

東西 176.56メートル (582尺)

南北 178.05メートル (587.5尺)

である。

以上の測定より考えられることは、金堂・講堂の中軸線が西に偏していることで、

これは最近の武藏国分寺でもその例があり、伽藍を考察する上で貴重な発見というべきである。また、金堂の位置がやや北に偏していることで、これも一考を要することと思われる。なお、588尺が天平尺の600尺(100間)に当たる点で、これも注目すべき数値といえよう。即ち、方100間に近い寺域を劃していたことが知られる。

(イ) 金堂東方建築遺構の考察

金堂跡の東方、中軸線より東方約65メートル線を西辺とする一辺19メートル(62.7尺)の正方形プランを有する建築遺構は、規模と位置より見て、一応七重塔跡かと推定しておいた。仮りにこれを七重塔として他国の国分寺塔のプランについて例を示すと、

出雲国分寺塔基壇	一辺長	14.55メートル	(48尺)
遠江	"	15.15メートル	(50尺)
陸奥	"	16.97メートル	(56.18尺)
伊豆	"	17.57メートル	(58.8尺)

となる。また、今夏調査された下総国分寺塔基壇は方約19メートルの由である。国分寺塔のプランとしては決して不適当ではない。尤も本遺構の上面はけずられて礎石は認められず、従って七重塔としての確認は得られないが、この建築の種類については、次回の調査に譲る。なお、方位が伽藍の方位と著しく違っていることが気にかかる。この事実は、建立の時期が他と異なるものと思われる。ここから出土した遺物の中に、青磁や北宋銭など、とくに時期の降る遺物が発見されることは、何らかの暗示を与えているように思われてならない。

(ウ) 金堂・廻廊遺構の考察

金堂跡は第1次においてほぼ明らかになったのであるが、ただ東南隅とそれに続く南側の一部のみが未調査であった。今回はこの未調査の部分を発掘し、これによって金堂の明確な規模を知ることができた。即ち、今回の発掘で得られた資料に基づき金堂全体の規模を検討すると、金堂雨落石組溝内側の東西長は31.4メートル(103.63尺)。南

北長は22.47メートル(74.15尺)であることが判明した。この規模は金堂基壇外周に繞らされた玉石敷きを加えての広さなので、この玉石敷の幅約1.2メートルを除いた基壇の実際の規模は、

東西長 29.0メートル(95.7尺)

南北長 20.07メートル(66.23尺)

ということになる。いま、諸国々分寺の金堂基壇の規模を示すと、

陸奥国分寺金堂基壇	31.51メートル	× 20.18メートル	(104尺)	(66.6尺)
			(108尺)	(67尺)
出雲	32.72メートル	× 20.3メートル	(110尺)	(73尺)
遠江	33.33メートル	× 22.12メートル	(122尺)	(76尺)
駿河	36.96メートル	× 23.03メートル	(122尺)	(3.8尺)
伊豆	36.96メートル	× 25.39メートル		

などで、これらの国分寺よりやや小ぶりであることが知られる。

なお、金堂南側東寄りの石組溝付近は、赤褐色の焼土が堆積している。このことは、第1次における北側西寄り付近に残された焼土と共に、金堂が火災にかかったことを物語るものといえよう。また、今回発見された石組溝西方の破壊された部分は、玉石と瓦片の散乱状態より判断して、すでに古くこの金堂倒壊時には失われていたと解される公算が大きい。

次は廻廊跡についてであるが、前述したように、前回と今回との2度にわたる調査にも拘らず、何ら得るところがなかった。

(エ) 下堀地区建築遺構の考察

下堀地区明神前1814～15番地の桑畠内地下より発見された建築遺構は、その南側と東側との雨落石組溝の構造が僧寺のそれと同一であること、その堂宇(東西長29.94メートル-98.8尺)の位置が僧寺講堂跡・金堂跡のほぼ西に当たり、且つ講堂・金堂の中心とこの堂宇の中心(中心の位置は推定であるが)との距離が181.46メートル(598.8尺で約100間)であること、および発見の鎧瓦・宇瓦が共に僧寺と同一意匠を有すること、などの点から考えて、国分尼寺の一堂宇であることは、もはや疑いを挿む余地がない。

しかもこの堂宇の規模が極めて壮大であることは、それが金堂か講堂のいずれかであることも、間違いないところである。ところで、この堂宇の南方は40メートル余にして地形が低下し、そのすぐ南を古道が東西に走っているのでこの堂宇の南には中門・南大門以外には大堂宇の建つ余地がない。この観点よりして、この堂宇は尼寺の金堂と考えて誤りない。

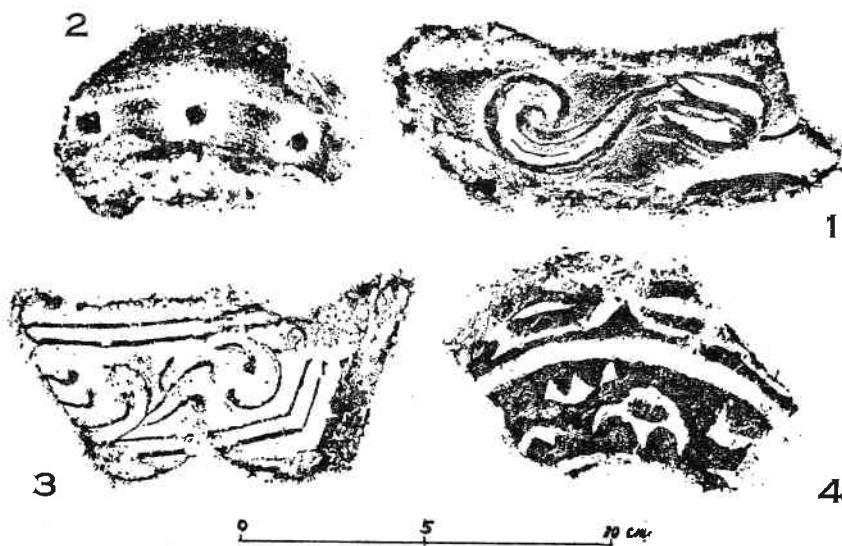
かく考えると、僧寺の西に相接して尼寺がほぼ同時に造営されたもので、古道を前にして東西に並ぶ僧尼両寺の往昔の偉容を、まのあたり想像することができよう。なお、今回尼寺跡より発見された新種の鎧瓦片は（挿図第5の4）、後述するように藤原期と考えられるところから、僧寺よりも永く命脈を保っていたとも考えられる。

尼寺跡については、大体以上の事実が判明したが、その他具体的な姿については、次期の調査に譲ることとする。

2 遺物の考察

今回は寺域の調査など、遺物を余り含まない地域を中心に地味な発掘を行なったためか、遺物の出土量は極めて少なかった。しかし、瓦では新種が2点（挿図第5の1・4）容器では普通の須恵器・土師器の破片が少々、磁器が1点、その他の焼成品としては円面鏡の破片1点が出土し（挿図第6）、また金属類では鉄釘が少々、それに古鏡1点が出土した。下にその概要を述べることとする。

瓦 丸・平瓦については省略するが、文様瓦については、僧寺より多く出土する複弁八葉蓮花文鎧瓦と均正唐草文字瓦のいわゆる一組瓦のほかに、単弁十二葉蓮花文鎧瓦の3種が尼寺跡の北側トレンチ付近より出土した。このうちの一組瓦が尼寺跡よりも出土することは、さきにも一言触れたように、僧尼両寺の建立時期が同じであることを示すものである。また、単弁鎧瓦は一組とほぼ同時期か、或はやや時代の降るようにも考えられ、今のところこの種は僧寺跡よりの出土を見ないので、尼寺に特有の瓦かとも考えられる。新種の瓦のうち字瓦（挿図第5の1）は、僧寺西縁の築地跡より発見されたもので、蓮花側面文に渦文を配した意匠を有し、平安初期と見られるもの。他



插圖第五 出土古瓦拓本 (1/2)



插圖第六 出土の硯写真 (1/2)

の新種は鎧瓦片で（挿図第5の4）、これは尼寺北側トレンチ付近の暗渠中より出土したものである。赤褐色で火中した形跡があり、意匠は小片のため明瞭を欠くが、鎧彫り的な手法をもつて製作している。年代は藤原期と考えられ、これによつていくらかでも尼寺存続の時期が判断されよう。

陶磁器 須恵器・土師器は少片で特殊なものなく、特に記述するようなものはない。磁器は金堂跡東方の正方形建築遺構の表土中より発見されたもので、竜泉青磁の破片である。

古銭 同じ表土中より出土した古銭は至和元宝で、現存2.0センチの径を有する本品は北宋銭で11世紀中頃（わが国の天喜年間で、後冷泉天皇、頼通の摂政時代に当る）のものであり、上記の青磁と同一時期に属する。

硯 正方形建築遺構より西に伸ばしたトレンチの地表下（中軸線より東方約72.72メートルの地点）約40センチより円面硯破片が出土した（挿図第6）。本品は鼠色に堅く焼成されたものである。推定径は17センチで、中央には余り高くない径10.8センチの陸、その周囲に幅1.1センチの浅い海を繞らし、陸は磨滑されていて使用された痕跡が明らかである。台脚部は欠損して不明である。様式上、奈良末、ないし平安初期に属するものと思われる。

鉄釘 鉄釘は4点出土している。いずれも僧寺金堂東南隅の西に遺存する南側石渠溝内の発見で、溝内に落ちこんだ焼土に混つて発見された。4点のうち1点はほぼ完形に近く、長さ25.0センチ、全面赤錆に蔽われて、原形は識別できないが、中央部付近における径は約2.5センチである。共に奈良時代の釘とみて誤りない（内藤政恒）。

IV むすび

前文でも記したように、今回調査した諸遺構においては、なお、将来の発掘の結果にまつべきものが多く、したがって、ここで結論的なことはさしひかえなければならぬが、一応今次の調査によって得た二、三の知見を、問題点として整理しつつ、成果の一端をかえりみ、あわせて今後の調査への足がかりともしたい。

1 寺域の四至と伽藍配置の問題

今回調査した結果、金堂の規模を明確につかむことができた。すなわち、これが東西31.4メートル南北22.47メートルであることが明かにされた。また、金堂講堂の中心をむすぶ南北中軸線から東方約65メートルの地で、段築による一辺約19メートルの方形の基壇の跡がみとめられ、これを塔跡と考える公算が大きくなつた。しかも、その方向は伽藍全体の方向とくいちがつていることも注意された。また、金堂の中心から北方約90メートル余の中軸線の東方60メートル付近の地域において、僧房か食堂の跡でないかとも考えられる遺構の一部を検出した。

これらの諸建築跡と、先年明かにされた講堂跡とを包括する寺域は、どのような範囲であったろうか。寺域の四至を明かにしたいということは、今次の調査の一つの目標でもあったので、ほぼ予想される各箇所（A・A'・B・B'・C・D地区）について調査を進めた次第であったが、幸いに西側においては、1.50メートルの幅をもって礎と粘土とで固められた基盤が南北につづいていることがみられ、築地跡と考えられた。また、他の箇所においてはかなり不明瞭なところもあるが、現段階では東西176.56メートル、南北178.05メートルと推算された。また、金堂中心からの距離は、それぞれ東108メートル、西68.56メートル、南94.25メートル、北83.80メートルとみられた。したがつて、金堂・講堂の中軸線は西に偏しているのである。試みにこれを現在の尺にあらためると、金堂中心から東は約356尺、西は約226尺となる。

従来、国分寺跡においては、寺域の四至を方形となし、この中に金堂が配置されることをもつて、基準的なものとみなされてきた。しかし、近年明かにされた武藏国

分寺跡においても、金堂・講堂を結ぶ中軸線は西に偏しているし、伊賀国分寺跡の場合も同じく西に偏している。むしろ、信濃国分寺のように、一方に偏して東か西かに塔を配置する場合、金堂とを結ぶ線を必ずしもその寺域の中心におかずには、塔の配置された方を広くとることも伽藍配置としてふさわしいものと考えられるのである。今日まで、各地の国分寺跡において寺域が明らかにされている例として紹介されているものは、一様にこの中央に金堂・講堂を結ぶ線を配しているが、四至の全部において積極的な決め手がなく、単なる想定線に過ぎないものも少くはない。たとえば、下野国分寺跡においても、その四至はあらためて究明されるべきものがある。また、遠江国分寺跡においても、西に土塁が残されていても、東においては問題とすべきものがある。信濃国分寺跡によって知られた新たな示例によって、我々は、国分寺跡の四至と、南北に金堂・講堂とを結ぶ線との関係については、全国的にあらためて再検討を試みる必要も覚えられるのである。

2 僧寺跡と尼寺跡との関係の問題

今回の調査で、図らずも僧寺跡の西方に隣接して尼寺跡とみなされる遺構の存することが確認され、建築跡が金堂跡とみなされるに至ったことは、大きい成果ということができよう（僧寺の金堂跡と講堂跡の中心と尼寺の金堂跡の中心は、東西に一直線にならび、その距離は181.56メートル（約100間）である）。本文でも述べてあるように、僧寺の金堂跡とこの尼寺の金堂跡とみなされるものが雨落石組溝の構造に共通さのあることや、それぞれの建築跡から発見される鎧瓦・宇瓦が同一意匠を有することや、または前述したような相互の距離や位置の上から考えても、この推定は間違いないものと思う。しかも、この尼寺跡からは別に藤原期と考えられる鎧瓦片も発見されており、僧寺よりもながく存続したことも想察される。

国分僧寺と国分尼寺との距離的、または方位的関係については、すでに石田茂作博士の見解が発表されている（『東大寺と国分寺』）。すなわち、博士は、全国の46例を材料として、その相互の距離を考え、5町（約600メートル）から2町（約220メートル）ぐら

いへだてていることが最も多いとしている。もっとも、これらの示例の中では、尼寺跡として確認されていないものも含まれているが、このような距離のものがもっとも多いことはみとめて差支えない。しかし、かなり接近した例もある。伯耆国分寺や周防国分寺の場合である。伯耆国分寺においては、現在鳥取県倉吉市国府にあるが、古寺屋敷と俗称されている台地に僧寺跡の所在をみとめてよく、その北に接するホツケジ畠とわれいている地域に尼寺跡の所在することを考えてよい。また、周防国分寺の場合にも、僧寺跡は山口県防府市国分寺町に所在するが、その西に接して相並んだ地域に院内の地名が存する。また、国分尼寺の四至を記した古文書に、「限東国分寺於北江疫神前堺」と明記されている（正中二年及び元徳三年国分寺文書による）。恐らく、地形の上から見ても、僧寺の西に相接して存在したことをみとめてよい。僧寺と尼寺とは、それぞれのもつ性格上、或る程度の距離をへだて、僧尼の近接することは禁ぜられていたとしても、それぞれの土地環境、経済的な事情、その他の事由によって寺院が相接近して営まれたこともまた考えるべきであつて、今回明らかにされた信濃の場合は、このような問題にも新たな示唆をあたえるものとされよう。

さらに、その方位については、石田博士は各地の示例を掲げて、特に僧寺を西に、尼寺を東に配した場合が最も多く、両寺を東西に配することが最も普通の方位であることを説いている。これは卓見であり、やはり最も正常な位置は、僧寺と尼寺とを東西に並列したものであったであろう。しかも、その場合、それぞれ南大門の外に東西に走る通路をもつていたものとみなされる。近年明らかにされた下野国分尼寺跡の場合も、従来、僧寺跡の東北に当る地と考えられていたが、実は、僧寺跡の東方に、ほぼ南大門の位置を東西に結ぶようにして存したことも明らかにされたのである。信濃国分寺の場合、千曲川の流域に沿うた段丘を利用し、この川に沿う旧東山道に面する位置に、僧寺を東に、尼寺を西に並列させ、しかも、尼寺をやや北寄りに位置させたことは、一つの基準的な配列であるとともに、よく自然の地勢に順応せしめ、古交通路を生かしたものといわなければならない。

なお、僧寺と尼寺との寺域の大きさや主要堂宇の規模の大きさの比較の問題もあ

る。従来、僧寺に比し、尼寺は、その寺域にせよ、堂宇にせよ、一段と小さいものと考えられてきている。これは、僧寺と尼寺とのもつ社会的な、或いは宗教的な機能や僧尼のそれぞれの数の上からみても考えられるところであり、実際に、それぞれの金堂跡の大きさを比較してみても、たとえば、甲斐国分寺の場合、僧寺の金堂は間口7間（87尺—約26メートル）奥行4間（44尺—約13メートル）に対し、尼寺のそれは間口5間（63尺—約19メートル）奥行4間（44尺—約13メートル）。陸奥国分寺の場合、僧寺の金堂は間口7間（81尺—約24メートル）奥行4間（44尺—約13メートル）に対し、尼寺は間口5間（36.2尺—約11メートル）奥行4間（28尺—約8.5メートル）という具合に、規模が一段と小さいことからも考えられる。しかし、今次調査の信濃国分寺の場合、僧寺の金堂の実際の基壇の規模は、東西長さ29.0メートル、南北長さ20.07メートルに対し、尼寺の金堂跡とみなされるものは、東西長さ29.94メートルとみとめられ、少くとも東西の長さにおいてほぼ同様であり、むしろ尼寺の方が少しく大きいという例を得たのである。下野国分寺跡の場合も金堂・講堂跡はかなり規模も大きく、見事な溝石や基壇の施設をもつことが知られるとともに、寺域全体もかなり広大なものであることが知られた。我々は、尼寺というと、寺域も狭く、堂宇の規模も小さく僧寺に比してより貧弱であるというように考えがちであるが、あらためて検討を要する必要も覚えられたのである。

以上、二、三の考えを述べたのであるが、信濃国分寺跡は、第1次及び第2次の調査によって、金堂・講堂跡も明らかにされ、塔跡とみとめられる位置もたしかめられ、あわせて四至についても、ほぼ推定することのできたことは、一つの成果であったとみなしてよい。まして、その西に接して、尼寺跡の所在の確認されたことは、僧寺の主要堂宇跡の保存状態の良好なこととあわせて特筆すべきことといわなければならない。同一地域に、僧寺と尼寺とが東西に相並んで、その遺構をとどめていることは、まことに貴重な学術的な資料であり、重要な文化遺産である。

この地域に対して、工場、或いは住宅等の建設の動きは活潑である。関係当局においては、この重要な史跡に対して1日も早く保存対策を講ぜられ、地域全体を史跡公

園として活用されることを希望してやまない(斎藤忠)。



挿図第七 現國分寺の景観写真



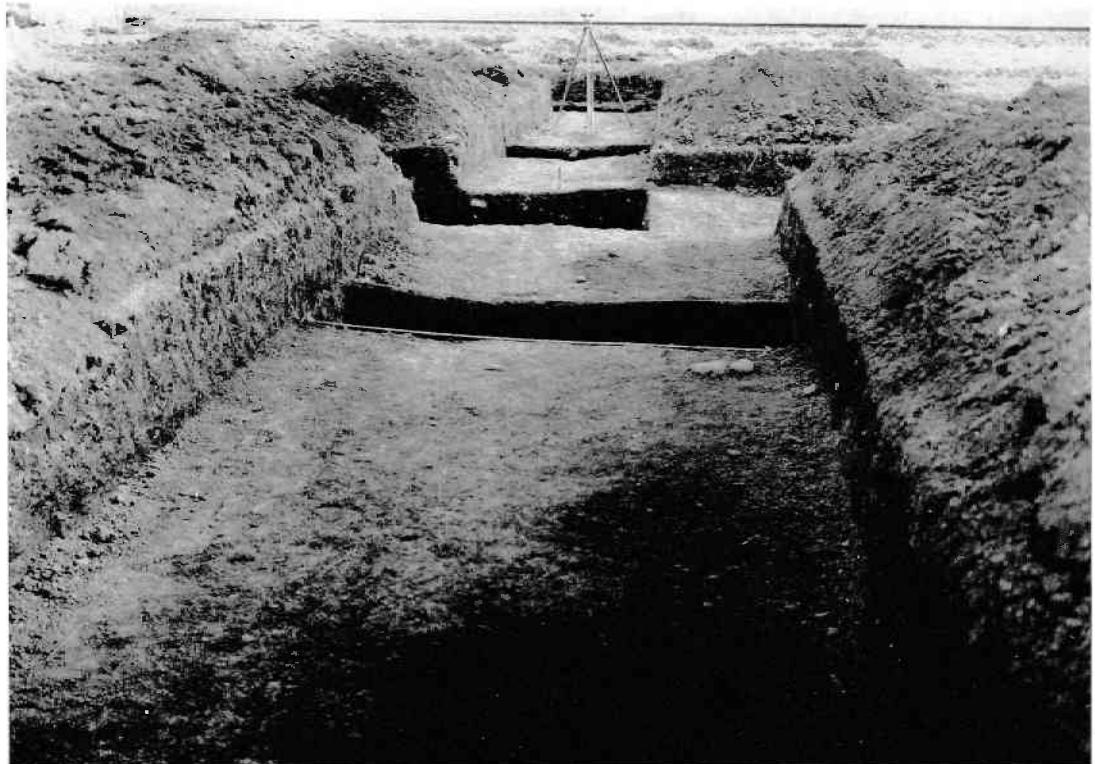
(1) 金堂東南隅雨落石組溝

東より



(2) 金堂東南隅雨落石組溝

西より



(1) 金堂跡東方建築遺構（推定塔跡）

北より



(2) 金堂跡東方建築遺構（推定塔跡）

北西より

信濃国分寺跡

第3次発掘調査概報

(付第2次発掘調査概報)

昭和42年10月1日発行

編集責任者 斎藤忠

印刷所 矢野印刷株式会社

発行者 上田市教育委員会

長野県上田市大手町